

I 熊本県の円筒形土器

高 木 正 文

はじめに

今の私は縄文文化論を述べる能力などとても持ちあわせていない。編年をいつまでやるのかという言葉があるが、それはすでに編年がほぼ完成している所で使う言葉であって、熊本県では使える言葉ではないと思う。特に熊本県の縄文時代早・前期の編年は極めて不安定な状態である。

昭和44年春、私は熊本県北部に位する中原西原遺跡から完形に復原できる貝殻条痕文を施した円筒形土器を発見した。この土器は直口した口縁部と平底を特徴とし、器形上は南九州の前平式土器に類似し、中九州においては注目されることのなかった新器形の土器であった^①。その後熊本県内におけるこの器形の土器の類例の発見に努めてみると、熊本市の兜山遺跡をはじめ既に採集されている資料の中にもかなり見出すことができた。また調査が進められている九州縦貫自動車道建設によって串刺しにされた遺跡の中にも現在6遺跡から発見されている。このように円筒形土器を出土する遺跡は続々と増えており、中九州の縄文土器編年上で観過しえない重要な土器であるとみられる。

本稿の主旨は中九州の縄文文化の推移や文化圏などを考察する上で背骨ともいべき縄文土器編年上、今だに見落されている円筒形土器を登場させることであり、また従来の編年に若干の疑問を投げかけることにある。

(1) 円筒形土器出土遺跡とその資料

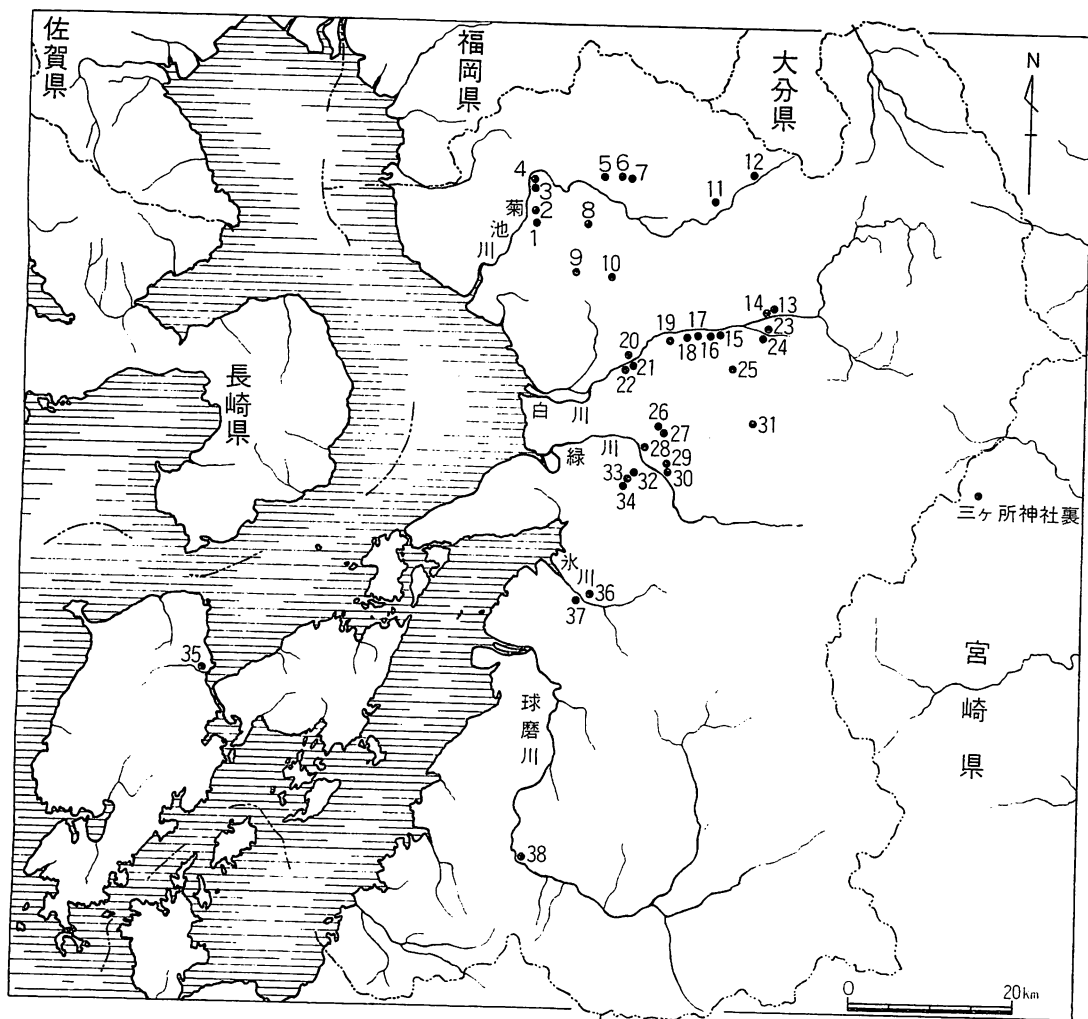
円筒形土器とは何かを定義して、資料紹介すべきだと思うが、ここでは逆の手順をとり、遺跡と資料から述べる。

① 中原西原遺跡（玉名郡菊水町瀬川中原西原、第1図1）

遺跡は標高約25m、有明海に注ぐ菊池川の支流江田川の左岸に位置する。水田面との比高が約10mを有する河岸段丘上に存在する。

遺跡の発見は昭和44年3月、圃場整備が行われているのを知った私が現地に赴き遺物を採集したことによるもので、その後遺物に興味をもたれた菊水町の東三次氏や坂本一氏らも遺物を収集された。遺物は先土器時代から弥生時代に及んでおり、このうち先土器時代の遺物についてはすでに紹介したが、ここでは縄文時代の円筒形土器とその遺構及び関連遺物について述べる。ただし、発掘調査が行われたわけではないので、ここで紹介する資料はたまたま記録できた遺構と採集できた遺物である。

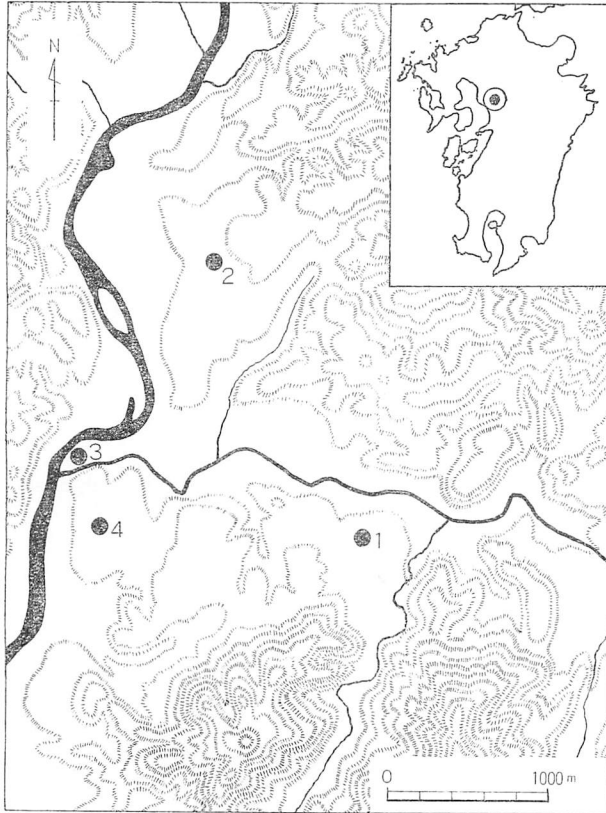
遺構としては柱穴や焼土の存在も認めたと記録できず、円筒形土器を伴うものとして記録できたのは第3図の土壙1カ所のみであった。この土壙は南北に長い長楕円形で、幅90cm、長さ129cm、深さ49cmを計り、褐色粘質土中に掘り込まれており、内部には黒褐色土が入っていた。土壙の底面にはこぶし大ぐらいの河石が敷かれ、それに混じって土器片4点も敷かれていた。また土壙底面は



第1図 円筒形土器出土遺跡分布図

- 1 中原西原 2 諏訪原 3 赤穂原 4 西山田 5 長沖 6 蒲生下原 7 成竹 8 向原
 9 富尾ガメンツウ 10 石川 11 上鍋 12 伊野 13 瀬田 14 雨留尾 15 年ノ神 16 一丁畑
 17 曲手 18 辛川 19 石原亀甲 20 兜山 21 新南部A 22 小関原 23 葛目 24 襟ノ平
 25 秋田原 26 櫛島 27 塔平 28 久保 29 中山神 30 上山神 31 干無田 32 沈目立山
 33 塚原 34 尾窪 35 丸尾ヶ丘 36 筒迫 37 室山 38 大瀬洞洞穴

北側にいくぶん傾斜しており、北端に置かれた河石は大きく、幅約20cm、長さ約30cm、厚さ約10cmを計り、平らな面を上に向けていた。土壌内は焼けてはおらず、河石も焼けてはいなかった。土壌埋土にも焼土・木炭は含まれておらず、土器片5点と小円礫1個が含まれていた。なおこの土壌の発見よりも先にこの付近から後述する完形の円筒形土器が採集されたが、同一地点であったかどうか確かでない。土壌の機能は不明であるが、炉址ではなく、貯蔵穴や墓壙などの可能性が考えられる。仮に墓壙とすれば北隅の河石を枕とした、成人ならば屈葬・小児ならば伸屈葬が想定され、また内部から出た小円礫、付近から採集された完形の円筒形土器などは副葬遺物とも見られるが、それを証明することはできない。



第2図 中原西原遺跡位置地図

- 1 中原西原遺跡 2 諏訪原遺跡 3 若園貝塚
 (縄文中・後期) 4 清原遺跡 (縄文後・晩期)

胴部の破片でいずれも無文で内外面とも滑らかに仕上げられている。胎土には1～4mmの砂粒を含んでおり、色調は黒褐色ないし褐色を呈する。9は埋土の上部から出土したもので、無文で尖底土器の底部の近くで風化が激しい。胎土には1～3mmの砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。10は直径3.08cm厚さ3.1cmを計る球形に近い円礫で加工痕はみられないが、何らかの用途を持っていたものと思われる。

土壌の時期は底面に敷かれていた土器片などから円筒形土器の時期と推定されるが、埋土中から出土した尖底土器は出土状態や色調の違いから同一遺構内出土ということで直ちに共伴遺物とすることはできないであろう。

11、12、15～24(第5、6図)は中原西原遺跡採集の円筒形土器のうちアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を施したものである。11は土壌の付近から採集され完形に復原できた円筒形土器である。口径12.7cm、底面径8.0cm、高さ19.0cmを計る直口、平底の土器である。外面には口縁部から胴部中程まで横位の貝殻条痕文で埋めつくされ、その上に一部重なるように、胴部中程から下方に縦位の貝殻条痕文を一定の間隔をあけて施文している。内面は無文で研磨されている。胎土は砂粒を含んでおり、色調は褐色を呈する。12～14は11の付近から採集したもので、12はいくぶん右上

1～4(第4図)は河石とともに土壌底面に敷かれていた土器である。

1は直口する口縁部で口唇部はまるみをもっており外面にアナダラ属の貝殻腹縁による横位の貝殻条痕文が施されている。胎土には2～3mm以下の砂粒を含んでおり、色調は暗褐色を呈し、外面には土器使用時の煤が付着している。2は平底を成す底部で、底面の直径は約11cmを計る。胎土は1～6mmの砂粒を含んでおり、色調は茶褐色を呈する。3、4はともに無文で、内外面とも滑らかに仕上げられており、特に内面は研磨されている。胎土には1～4mmの砂粒を混入しており、色調は茶褐色ないし暗褐色を呈する。

5～10(第4図)は土壌埋土中に含まれていた遺物である。5は外面に貝殻腹縁による貝殻条痕文を縦位に施文したあと、横位に施文しており、内面は研磨している。6～8は

りの横位の貝殻条痕文を施した口縁部で、内面は研磨され、胎土には砂粒を含み、暗褐色を呈する。13、14は円筒形土器の底部で、胎土には1～5mmの砂粒を含んでおり、色調は暗褐色ないし褐色を呈する。底面の直径は13が7.4cm、14が9.6cmを計る。

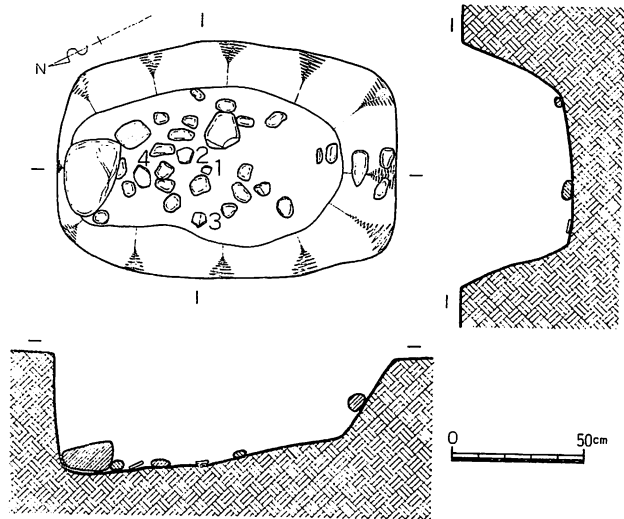
15～24は貝殻腹縁を主として横位に引掻いた貝殻条痕文を施した円筒形土器の口縁部と胴部の破片で、直線的は15、16、19～21、波状に施文した17、24、強弱をつけて引掻いた18、24、縦位に施したあと横位に施し、その下方では波状に施すといっ

た、直線と曲線の貝殻条痕文をもつ23がある。口縁部から胴部中程まで施文がみられ、底部近くには施文されていない。いずれも内面は研磨されており、胎土には1～4mmの砂粒を混入しており、色調は黒褐色、暗褐色ないしは茶褐色を呈する。

25（第6図）はアナダラ属の貝殻の背を器壁に押し当て引掻いた貝殻条痕文を施した土器で、口縁部は直行し、口径は27.0cmを計り、文様帯は口縁部に6cmあり、横位に施されている。内面は土器製作時の指の圧痕が残っており、研磨はゆきとどいていない。胎土には1～4mmの砂粒を含んでおり、色調は茶褐色ないし黒褐色を呈している。

26～30（第6、7図）は棒状施文具によるとみられる沈線文を施した土器である。26は口縁部が直行し、口径21.4cmを計る土器で、先端が割箸のように幅のある施文具による沈線文をいくぶん斜縦位に引いたあと、同施文具で横位に重ねて引いており、碁盤の目のような文様構成となっている。内面は無文で篋削りされたあとがみられる。胎土には1～4mm程度の砂粒を含んでいるが、最大の砂粒は長さ9mmを計るものも含まれている。色調は黒褐色を呈する。27～29は先端の尖った施文具による横位の沈線文を施した土器で、沈線にいくぶん右下がりと左下がりの両者があるため交叉がみられる。いずれも内面は研磨されており、胎土には1～5mmの砂粒を含んでおり、色調は暗褐色を呈する。30は27～29よりもさらに鋭利な施文具を用いた沈線文のある胴部の破片で復元胴径は約20.8cmを計る。沈線は細く、縦位に引いたあと、若干右上りの横位に引いている。胎土には1～5mmの砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。

31～37（第7図）は無文の土器であるが、31の口縁部以外は、文様のある土器の胴部以下である可能性もある。31は内外とも無文で研磨されており、胎土には1～4mmの砂粒を含み、暗褐色を呈する。32～37は内外とも滑らかに仕上げられており内面は特に研磨されている。胎土に1～6mmの砂粒を混入しており、色調は暗褐色ないし褐色を呈する。



第3図 中原西原遺跡発見土壌

（1～4は土器、第4図の土器番号と一致）

38 (第7図) は平底で、円筒形土器の底部とみられる。底面の直径は9.0 cmを計り、胎土には1～5 mmの砂粒を混入しており、色調は茶褐色である。

39 (第7図) は塞ノ神式土器の口縁部とみられ、外側に開いた口縁部の外面に2種類の施文がみられる。上部には割箸状の幅のある施文具の先端で斜めに突いた文様を連続して横位に二段に施文している。あるいはこの施文具は貝殻の一部を使用しているのかもしれない。その下には右下がりの沈線が平行に引かれている。胎土には1～4 mmの砂粒が混入されており、色調は黒褐色を呈する。この遺跡では円筒形土器との関係は不明であるが、胎土や色調あるいは施文具に似たところがある。

40、41 (第7図) は押型文土器である。40には山形文、41には楕円文が横位に施されている。胎土には1～4 mmの砂粒を含み、色調はそれぞれ茶褐色、黄褐色を呈する。円筒形土器の胴部が直立しているのに対し、この押型文土器の胴部は斜めに倒れており、明らかに器形が異なる。この遺跡からは石器も多数出土しており、その中には小形の局部磨製石鏃や片脚石鏃もみられる。

②諏訪原遺跡 (玉名郡菊水町原口諏訪原、第1図2)

菊池川左岸、標高約40mの諏訪原台地上にあり、昭和44年から45年にかけて九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査が行なわれた^③。報告書が未刊行であるので詳細はわからないが、私の記憶では幅50cm、長さ250cm、深さ50cm程度の長楕円形をした土壇が2カ所発見され、いずれにも焼土が堆積しており、その1カ所から完形の円筒形土器が発見された。貯蔵穴の機能について調査者の緒方勉氏から炉穴ではないかとの御教示を受けた。

42 (第8図) が土壇から出土した円筒形土器である。この土器については緒方勉氏が紹介されているが、ここでは私の観察結果を述べたい。口径23.3cm、高さ29.8cmで底面の直径は15.0cmを計る直口、平底の土器である。底部はいくぶん斜めに作られているため、平面上に土器を置くと一方に傾いている。また底面は平底に作られたとみられるが、土器製作の過程、おそらく乾燥あるいは焼成時にやや上げ底ぎみになったものと推定される。口縁部に幅7cmの文様帯がみられ、横位に撚糸文が施されている。内面はいくぶん研磨されている。胎土には砂粒を含んでおり、色調は暗褐色ないし茶褐色を呈する。

他の一カ所の土壇からも同類の土器片が出土しており同時期の遺構とみられる。なおこの遺跡からはアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を横位に施した円筒形土器の破片も数点採集されている。このほか楕円や山形の押型文土器も採集されている。

③赤穂原遺跡 (玉名郡菊水町大久保赤穂原、第1図3)

菊池川左岸の標高約60mの洪積台地上にある遺跡。発掘調査はおこなわれていないが、数点の円筒形土器の破片が採集されている。文様は貝殻条痕文と撚糸文がみられ、器壁は厚手で2cm以上あるものもみられる。

43 (第8図) は厚さ1.8cmを計り、撚糸文を横位に施文した胴部の破片で、内面は研磨されている。胎土には1～3 mmの砂粒が含まれており、色調は茶褐色を呈する。

④西山田遺跡 (玉名郡菊水町下津原西、第1図4)

菊池川左岸の河岸段丘上にある。標高約20mあり、円筒形土器や押型文土器が採集されている。

円筒形土器は胴部中位の破片で、上半にアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を横位に施している。

⑤長沖遺跡（山鹿市十三部字長沖、第1図5）

標高約60mの八峰から延びてきた丘陵の西端部、標高約40m、水田との比高10mのところにある遺跡である。昭和42年山鹿高校考古学部などによって発掘調査され、その際押形文土器・塞ノ神式土器とともに円筒形土器の破片も採集された。詳細は不明であるが、アナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文が施文されていた。

⑥蒲生下原遺跡（山鹿市蒲生下原、第1図6）

菊池川支流吉田川の上流左岸にある広大な台地上にある遺跡で、標高は約60mのところにある。 「鹿本町史」によれば^⑥円筒形土器とみられるものが出土している。口縁部がほぼ直行するもので外面にアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文が施された厚手の土器である。燃糸文の施された厚手の土器もある。この遺跡からは山形や楕円の押型文土器も採集されている。

⑦成竹遺跡（鹿本郡鹿本町御宇田成竹、第1図7）

蒲生下原遺跡のある台地と連った御宇田台地上にある遺跡で、同遺跡から東方約2Km、標高70mの位置にある。「鹿本町史」によれば^⑦山形および楕円の押型文土器や貼瘤のある無文土器とともに条痕文土器が採集されており、凶面によればアナダラ属の貝殻の腹縁または背を器面に当てて引掻いたとみられる貝殻条痕文土器である。

⑧向原遺跡（鹿本郡鹿央町向原、第1図8）

広大な洪積台地の一端にある遺跡で、標高78mにあり、北側の菊池川支流岩原川の形成した狭い水田面との比高は20mある。昭和47年に鹿本高校考古学部によって発掘調査された。詳細は不明であるが、幅70～80cm、長さ150cm、深さ50cm程度の土壙が2カ所見つかかり、平面形は一方に偏してくびれがあるこけし形をしていた。内部は焼けており、焼土の堆積がみられた。内部の焼土の堆積の状態は諏訪原遺跡の遺構と類似していたが、調査者の隈昭志氏の御教示によると押型文土器の時期のものであるという。遺構の機能については隈氏も炉址ではないかと推定しておられる。

44、45（第9図）は昭和43年に寺本重美氏が向原遺跡で採集され、現在鹿央町教育委員会に保管されている資料である。円筒形土器の胴部の破片とみられ、いずれもアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を横位に施している。内面はよく研磨されている。胎土には砂粒を含んでおり、色調は暗褐色を呈する。なお、同時に採集された資料に押型文土器もみられる。

⑨富尾ガメンツウ遺跡（鹿本郡植木町富尾ガメンツウ、第1図9）

田原坂へ延びる広大な洪積台地の付根部北端、標高約100mのところにある遺跡である。東光彦・富田絃一の両氏により円筒形土器とみられるものが紹介されている^⑨。土器の外面上半にアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を横位に施しており、下半は無文のままで内面は研磨されている。この土器のほかに押型文や燃糸文土器等は殆どみられないということである。

⑩石川遺跡（鹿本郡植木町石川、第1図10）

標高75mの洪積台地上にある遺跡。西合志町教育委員会に燃糸文が施された円筒形土器の破片1点が採集されている。

⑪上鍋遺跡（菊池市水源鍋倉上鍋、第1図11）

菊池川上流左岸、標高約250mの丘陵上にある遺跡。故田中義信氏の収集資料中に図46(第9図)がみられる。

口縁部は直行しており、外面の施文はアナダラ属の貝殻の背によって引掻いたものではないかとみられる。内面は無文で滑らかに仕上げられ、口縁部付近は横なでのあとがみられる。胎土には1～3mmの砂粒を混入しており、色調は茶褐色ないし暗褐色を呈する。

⑫伊野遺跡（菊池市水源伊野、第1図12）

菊池川上流右岸、阿蘇外輪山西斜面、標高約500mの高原にある遺跡。故坂本経堯氏の記録に円筒形土器の破片がみられる^⑩。その1つは実側図によると厚さ約1cmの胴部の破片で、外面にアナダラ属の腹縁による横位の貝殻条痕文が施されている。このほか縄式や曾畑式土器も採集されている。

⑬瀬田遺跡（菊池郡大津町瀬田、第1図13）

白川右岸、阿蘇外輪山麓の標高約250mの丘陵にある遺跡で現在採石場となっている。熊本市弓削町山尻の光沢徳行氏により資料が採集されている。

47(第9図)がそれである。胴部の破片で外面に横位に捺糸文が施され、内面は無文で研磨されている。胎土には1～4mmの砂粒を含んでおり、色調は茶褐色を呈している。このほか、山形文や楕円文の押型文土器が採集されている。

⑭雨留尾遺跡（菊池郡大津町雨留尾、第1図14）

瀬田遺跡から500m程白川寄りの河岸段丘上にある遺跡で、標高は約200mある。光沢氏採集資料中に円筒形土器とみられるものがある。48、49(第9図)がそれである。

48は縦位に条痕文を施したあと同じ施文貝で横位に重ねて施している。この条痕文の施文具は貝殻ではないようで、楕状のものを使用しているようである。内面はよく研磨されている。胎土に1～3mmの砂粒を含んでおり、色調は暗黄褐色を呈している。49は明らかに楕状の施文具で条痕文を施しており、縦位に粗に施したあと、横位に密に施している。文様のない下半は篋で縦になでている。内面はやや研磨されている。胎土に1～5mmの砂粒を含んでおり色調は茶褐色である。この遺跡からは底面の狭い平底の山形押型文土器も採集されている。

⑮年ノ神遺跡（菊池郡菊陽町年ノ神、第1図15）

白川左岸、標高約110mの河岸段丘上にある遺跡で、以下に述べる一丁畑遺跡、曲手遺跡、辛川遺跡、石原亀甲遺跡も同段丘上にある。資料は光沢氏採集のものである。

50～53(第10図)はアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を横位に施している。50は興味ある資料で、口径14.6cmを計る口縁部破片であるが、上部では貝殻条痕文を施し、その下部では山形押型文を施している。押型文土器と円筒形土器との関係を示す重要な土器である。51～53は条痕を丁寧に施文したらしく溝が深い。51と52は同一個体とみられる。いずれも内面はよく研磨されている。胎土には1～4mmの砂粒を含み、色調は黒褐色ないし暗褐色を呈している。このほか捺糸文土器、山形・楕円・格子目の押型文土器などが採集されている。

⑯一丁畑遺跡（菊池郡菊陽町馬場楠一丁畑、第1図16）

年ノ神遺跡の西方約500mの標高約110mの段丘上にある。光沢氏採集資料である。

54～60（第10図）のうち図55のみは他の遺物の出土するところから100 m程南の戸次水溜池のところから採集されたが、これに含めた。55、56、59はアナダラ属の貝殻腹縁を横位に施しており、54、57は縦位にしたあと横位に重ねて施文している。58は上半では斜め右下へ、下半では斜め左下へ施文している。いずれも1～5 mm程度の砂粒を含んでおり、色調は暗褐色、茶褐色、褐色を呈する。60は平底で円筒形土器の小形の器形の底部と思われ、底面の直径は6.3 cmを計る。胎土に1～3 mmの砂粒がみられ、色調は茶褐色を呈する。

⑰曲手遺跡（菊池郡菊陽町曲手、第1図17）

一丁畑遺跡の西方約800 m、標高約90 mのところ位置する。光沢氏が楕円・山形の押型文土器を採集されており、その中に円筒形土器の破片とみられるのがある。

64（第10図）がそれで、外面にアナダラ属の貝殻条痕文が施されている。胎土には1～4 mmの砂粒を含み、色調は黒褐色である。

⑱辛川遺跡（菊池郡菊陽町辛川、第1図18）

曲手遺跡から約1 km西方の標高約90 mのところにある遺跡。光沢氏が採集された中に円筒形土器が含まれている。

61～63（第10図）のうち、61は楕円の施文具による条痕文を斜めに施しており、内面は研磨している。62は貝殻腹縁で横位に波状の条痕文を施している。63は円筒形土器の底部とみられる。底径が8.8 cmを計る平底である。いずれも胎土に1～4 mmの砂粒を含んでおり、色調は茶褐色ないし褐色を呈する。このほかこの遺跡からは楕円・山形・格子目の押型文土器、甕式土器、曾畑式土器、塞ノ神式土器も採集されている。

⑲石原亀甲遺跡（熊本市弓削町石原、第1図19）

辛川遺跡からさらに西方約3.5 kmの標高約80 mの河岸段丘上にある遺跡である。昭和51年に熊本県文化課で発掘調査がおこなわれ、円筒形土器の破片が採集された。アナダラ属の貝殻条痕文と、尖った棒の先端で沈線を施したのがある。

⑳兜山遺跡（熊本市黒髪町字留毛、第1図20）

白川右岸、標高152 mの立田山の南麓から突き出た標高約50 mの通称兜山という丘陵上にある遺跡。東光彦氏らにより多量の遺物が採集され、熊本博物館に保管されている。押型文、捺糸文、条痕文、無文などがある。ここでは条痕文土器の一部を紹介したい。

65～73（第11、12図）は条痕文を施した直口する口縁部と胴部の破片で、第74～76（第12図）は円筒形土器の底部とみられる平底である。条痕文はアナダラ属の貝殻腹縁で引搔いて施文し、65～71は横位に引搔き、71は1 cmごとに強弱をつけている。72、73は縦位に引搔いたあと横位に引搔いている。復元口径は65が27.1 cm、66が12.8 cm、67が12.6 cm、70が16.8 cmを計る。内面は研磨され、胎土には1～3 mmの砂粒を混入し、色調はいずれも暗褐色ないし茶褐色を呈する。74～76は底面の直径がそれぞれ、8.4 cm、10.6 cm、11.4 cmを計る。胎土には1～5 mmの砂粒の混入がみられ、色調は暗褐色ないし褐色を呈する。

㉑新南部A遺跡（熊本市新南部町、第1図21）

白川左岸、標高約30 mの河岸段丘上にある遺跡。熊本博物館の資料の中にアナダラ属貝殻の腹縁

による横位の貝殻条痕文の施された円筒形土器の破片とみられるものがある。

②小関原遺跡（熊本市大江町渡鹿小関原、第1図22）

白川左岸、標高約20mの河岸段丘上にある遺跡。新南部A遺跡から約600m南西で、兜山遺跡とは白川を挟んで700m離れて相対している。熊本博物館の資料の中に兜山遺跡の貝殻条痕文土器と同様のものがみられる^⑩。また押型文土器も採集されている。

③葛目遺跡（阿蘇郡西原村鳥子葛目、第1図23）

白川支流鳥子川右岸、標高200mの丘陵上にある遺跡。坂田義広氏らにより資料が採集され、現在西原村民俗資料館に保管されている。その中にアナダラ属の貝殻腹縁による横位の貝殻条痕文の施された土器が1点みられる。このほか押型文土器が採集されている。

④襟ノ平遺跡（阿蘇郡西原村鳥子襟ノ平第1図24）

白川支流鳥子川左岸、標高170mの台地上にある遺跡で、葛目遺跡から約1km南西に位置する。

坂田義広氏採集、西原村民俗資料館保管の資料中に77、78（第12図）がみられる。いずれも直行した口縁部で、アナダラ属の貝殻の腹縁による貝殻圧痕文が密に施され、内面はよく研磨されている。胎土には砂粒を含んでおり、色調は77が茶褐色、78が黒褐色を呈する。

⑤秋田原遺跡（阿蘇郡西原村秋田、第1図25）

木山川右岸の標高195m、水田面との比高40mの台地上にある遺跡。西原村立河原小学校の生徒により円筒形土器が採集され、同小学校に保管されていたが、現在は西原村民俗資料館に移管されている。

97（第16図）がそれである。口径は19.6cmを計り、外面上半はアナダラ属の貝殻腹縁による横位の条痕文を三段に渡って施文し、幅10cmの文様帯を作っている。外面下半は斜めに篋でなでられ内面は研磨されている。胎土は砂粒を混入しており、最大の砂粒は8mm程のものもある。色調は暗褐色を呈し、外面には煤が付着している。ここからは押型文土器は出土していないようである。

⑥櫛島遺跡（上益城郡益城町櫛島、第1図26）

まわりを水田で囲まれた標高8～10mの微高地上にある遺跡。昭和47年九州縦貫自動車道建設に伴って熊本県文化課で発掘調査がなされ、塞ノ神式土器とともに貝殻条痕文を施す土器が出土した出土状態等については緒方勉氏が詳しく報告されている^⑪。

貝殻条痕文はアナダラ属の貝殻腹縁で横位に引掻いて施文しており、直線的なものと波状をなすものがあり、一部に貝殻腹縁の圧痕を施したものとみられる。施文部位は口縁部付近の外面に限られ、内面は無文で研磨されている。胎土には小砂粒を混入しており、色調は暗褐色ないし茶褐色を呈するものが多い。口縁部は直行あるいはいくぶん外反ぎみのものもあり、完形土器が出土していないが、底部破片に平底と丸底がある。このことから緒方氏は直行する口縁に対して二種類の底部つまり二種類の器形を推定しておられる。また直行する口縁で捺糸文を施すものもある。

遺構として不整形の土壇が3カ所発見され、その中には焼土がみられた。緒方氏は関東地方に発見例のある炉穴と推定されている。破片ではあるが、炉穴から塞ノ神式と貝殻条痕文土器の両者が出土しているのは注目される。また第4層出土遺物が塞ノ神式と貝殻条痕文土器で占められ、押型文は小破片が1点出土しているのみであるのは三者の関係をj知る上で重要視される。このほか遺構

として集石も数カ所あった。石器は石鏃、小形石槍、横につまみのある細い石匙、礫器などが出土している。

㉗塔平遺跡（上益城郡益城町塔平、第1図27）

木山川左岸にある標高約30mの台地上にある遺跡。榊島遺跡の南東1.4kmに位置する。圃場整備がおこなわれた際、資料が採集され、熊本博物館に保管されている。アナダラ属の貝殻腹縁による条痕文を施したやや厚手の土器である。

㉘久保遺跡（上益城郡御船町豊秋、第1図28）

緑川支流御船川左岸の台地上にある遺跡で標高約30m、水田面との比高は約20mある。九州縦貫自動車道建設に伴って、昭和48年に熊本県文化課で発掘調査を実施し、結果は報告した。^⑩

79～87（第13図）はいずれも外面にアナダラ属の貝殻腹縁による条痕文を施した土器である。口縁部は直行し、横位に条痕文を施している。直線的に引掻くもの、強弱をつけて引掻くもの、波状に引掻くものがあり、82、85は縦位に引掻いたあとをおこなっている。85の復原元径は23.4cmを計る。胎土は砂粒を含んでおり、色調は暗褐色ないし褐色を呈する。このほか直行する口縁部で外面に絡縄帯圧痕文を施した破片がある。後述する塚原遺跡の土器と類似している。88（第23図）は集石遺構の付近で出土したもので、集石遺構からは83が出土しており、円筒形土器に伴う石器とみられる。硬質砂岩製のチョッパーで幅15.2cm、長さ13.2cm、厚さ3.5cmで、重さは約890gである。この遺跡からは押型文土器も採集されているが、口縁部が外反しており、円筒形土器とは器形が異なる。

㉙中山神遺跡（上益城郡御船町中山神、第1図29）

御船川左岸、久保遺跡と同台地上にあり、後述する上山神遺跡も同台地上にある。中山神遺跡は標高約50m、久保遺跡から3500m南東の位置にある。水田面との比高は約30mある。資料を実見していないが緒方勉氏によると貝殻条痕文を施した厚手の土器が採集されている。^⑪

㉚上山神遺跡（上益城郡御船町上山神、第1図30）

中山神遺跡から南西700mの位置にある。標高約60m、水田面との比高は約40mある。中山神遺跡同様、緒方勉氏によると貝殻条痕文を施した厚手の土器が採集されている。^⑫

㉛干無田遺跡（上益城郡御船町田代干無田、第1図31）

御船川上流八勢川右岸の高原にある遺跡で標高は480mである。緒方勉氏により試掘がおこなわれ、資料が紹介されている。^⑬条痕文土器、斜行縄文土器、楕円押型文土器、網目状捺糸文土器が同一層から出土しているが、円筒形を成すものは条痕文土器だけである。条痕文土器は口縁部の外面にアナダラ属の貝殻腹縁による横位の引掻きのある土器である。その他の文様の土器は口縁部が外反し、胴部はふくらみ、丸底になるものと推定されている。

㉜沈目立山遺跡（下益城郡城南町沈目立山、第1図32）

浜戸川右岸、舞ノ原台地の南縁近くにある遺跡。標高約35m、水田面との比高は30m程度ある。昭和51年県道宇土甲佐線改良工事の発掘調査により資料が得られた。調査は熊本県文化課がおこない、調査者の緒方勉氏の御教示によると、捺糸文を施した土器と塞ノ神式土器が出土しているという。そのうち捺糸文土器を実見したが、詳細は報告書の刊行を待ちたい。概要を述べれば、口縁部

を欠損しているがほぼ完形に近い円筒形平底の土器で、外面に底部近くまで縦方向の燃糸文が施されている。

㊸塚原遺跡（下益城郡城南町塚原、第1図33）

浜戸川左岸、標高約30m、水田面との比高20mの塚原台地上にある。沈目立山遺跡とは約1.5km離れ、浜戸川を挟んで相對している。昭和47年から49年まで九州縦貫自動車道の埋蔵文化財発掘調査がおこなわれ、方形周溝墓など多数の墳墓が発見されたが、その時円筒形土器も出土した。^⑧

87（第14図）は塚原遺跡出土の円筒形土器である。口径19.2cm、復元推定高さ31.5cmのほぼ完形の土器で、口縁部外面に幅6cmの文様帯があり、絡縄帯圧痕文が施されている。また口唇部は平でここにも絡縄帯圧痕文が施されている。それ以外の部分は無文で、滑らかに仕上げられている。胎土には砂粒を含んでおり、色調は淡灰褐色を呈する。このほか沈線文を施す土器の破片があったが現在紛失している。記憶しているところを述べれば、縦位の沈線の間平行する斜線を何本も施し、一つおいて逆下がりの斜線を施したものであった。塞ノ神式土器、押型文土器も出土している。

㊹尾窪遺跡（下益城郡城南町尾窪、第1図34）

塚原台地の南側、幅50m程の小谷を隔てたところに尾窪台地が延びてきており、そこに尾窪遺跡がある。標高は約30mある。九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が昭和47年に実施され、円筒形土器も採集された。^⑨

90～96（第15図）が尾窪遺跡採集の円筒形土器である。90～93はアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻条痕文を施したもので、縦位に引掻いたあと横位に引掻き、格子目状の文様構成をしている口径は90が22.4cm、91が17.4cmを計る。94は貝殻条痕を何度も重ねて施している。95、96は現場で実測したためいくぶん正確さを欠く図面であるが、現物が紛失しているのでこれを使用した。95は鋭利な先端をもつ棒状の施文具で沈線文を縦横に引いており、縦位には短く斜めに引くものもある。96は底面の直径が7.5cmを計る平底である。これらは胎土に砂粒を含んでおり、色調は暗黄褐色を呈している。このほか山形の押型文土器も数片採集されている。

㊺丸尾ヶ丘遺跡（本土市本渡町丸尾、第1図35）

天草下島の広瀬川右岸、標高約20mの丸尾ヶ丘台地上にある遺跡。昭和38年に上田万寿夫氏や森田氏らにより採集された遺物が天草キリシタン館に保管されている。

98～104（第16図）はいずれもアナダラ属の貝殻腹縁による文様を施したものである。

98、102、103は横位に波状に引掻き、99～101、104は貝殻腹縁による圧痕を連続させたように、強弱をつけて条痕文を施している。内面は無文で滑らかで、研磨のあとの観察できるものもある。胎土には1～3mm程度の砂粒を含んでおり、色調は暗褐色ないし茶褐色を呈する。押型文土器は採集されていないようである。

㊻筒迫遺跡（八代市宮原町岩立、第1図36）

永川の北方、小山塊の谷間の標高が約70mのところにある遺跡。九州縦貫自動車道建設のため、昭和51年熊本県文化課で発掘調査がおこなわれた。村井真輝氏に御教示をうけ、資料を実見した。厚手でいくぶん大型の円筒形土器で、口縁部が直行し、外面にアナダラ属の貝殻腹縁による条痕文が施されていた。また平底も同時に出土している。その他同じ層から山形・楕円の押型文土器が出

土し、その上層からは縄式土器が出土しているということである。

㊸室山遺跡（八代郡宮原町今室、第1図37）

八代平野を一望する標高48mの丘陵上にある遺跡。佐藤伸二氏により室山古墳の発掘がおこなわれた時、円筒形土器の破片が出土し、報告された。それによると、明褐色のローム層に切りこまれた不整形な土塊が数カ所発見され、上部は削平されていたがそのうち最も大きい幅50cm、長さ180cm、深さ20cmの土塊から土器片と黒曜石の剥片が出土したという。土器は口縁部が直行し外面にアナダラ属の貝殻腹縁を押しあてた、いわゆる貝殻圧痕文の土器である。胎土には砂粒を含んでおり押型文土器の胎土に類似しているところから佐藤伸二氏は縄文早期のものであろうと推定しておられる。

㊹大瀬洞洞穴遺跡（球磨郡球磨村大瀬、第1図38）

球磨川中流右岸、標高約80mにある洞穴遺跡である。昭和44年熊日学術調査団によって発掘調査がおこなわれた。資料を実見していないので詳細はわからないが、杉村彰一氏の御教示によれば、押型文土器と貝殻条痕文土器が地点を異にして出土したという。

(2) 円筒形土器に関する考察

(1) 円筒形土器の特徴

円筒形土器の最大の特徴は、直口と平底で、胴部の張りが殆んどないことである。完形土器もしくはそれに近い資料で口径と底径と高さの比率を出してみると、中原遺跡の完形土器が1:0.6:1.5、諏訪原遺跡の完形土器が1:0.6:1.3、塚原遺跡の完形に近い土器を復原した比率が1:0.6:1.6となる。このことから底面径は口径の0.6倍で、高さは口径よりも大きいが一様ではないことがわかる。おそらく他の資料もほぼこのようなことが言えるのではなかろうか。口径は計測した資料では、最小は12.6cm、最大は27.1cmを計るが、さらに大型のものもある。

施文部位は口縁部外面あるいは胴部上半で、胴部下半までおよぶのはまれである。口唇部は丸みをもつものから平口縁まである。口唇部は無文が多いが、塚原遺跡出土の完形に近い土器のみには施文がみられる。土器内面は殆んどが研磨されており、これも円筒形土器の特徴の1つともいえる文様は貝殻条痕文、貝殻圧痕文、櫛目条痕文、撚糸文、絡縄帯圧痕文、沈線文があるが、貝殻条痕文が量的に最も多い。貝殻条痕文の施文具はアナダラ属の貝殻で、殆んどはハイガイである。腹縁で引掻くものが多いが、背で引掻いたとみられるものも若干ある。横位に引掻いたもの、縦位に引掻いたあと横位に引掻いたもの斜位に引掻いたもの不規則に引掻いたものがあり、前二者が多い。また引掻き痕は、直線的なもの、器面に押し当てる力に強弱をつけ連続して貝殻圧痕文を施したようなもの、波状をなすもの、不規則な曲線をなすものがみられる。貝殻圧痕文は襟ノ平遺跡などで出土しているが、ハイガイの腹縁外面を押し当てて施文している。櫛目条痕文は櫛歯状の施文具で引掻いた文様で、辛川遺跡では斜位に、雨留尾遺跡では縦位に引掻いたあと横位に引掻いて施文している。撚糸文円筒形土器は諏訪原遺跡で完形が出土しているが、諏訪原遺跡のような撚糸の大きなものと、瀬田遺跡のような撚糸の小さなものがあり、またころがす方向も横位のもの縦位のものがある。絡縄帯圧痕文の円筒形土器は塚原遺跡で完形に近いものが出土しており、久保遺跡

からも口縁部が出土している。燃った紐を縦に押し当て連続的に横に平行移動させて施文したものである。沈線文は先端の鋭利な施文具と割箸の先端のような施文具が用いられ、いずれも直線で、横位に引いたもの、縦位に引いたあと横位に引いたもの、縦位に引いた間を斜線で埋めるものなどがある。

円筒形土器の胎土中には1～3mm程度の砂粒を混入しており、砂粒が5mmを超えるものが含まれているものもある。色調は個々によって異なるが、茶褐色ないし暗褐色を呈するものが大部分を占める。

(2) 円筒形土器の分布

第1図の分布図をみればわかるように、今までに確認できた熊本県内における円筒形土器の分布は、北は玉名郡菊水町や山鹿市、西は天草下島の本土市、南は球磨郡球磨村、東は阿蘇郡西原村におよんでいる。貝殻条痕文の円筒形土器は鹿児島県鹿児島郡吉田村小山遺跡^⑧から完形土器が出土しており、宮崎県西臼杵郡高千穂町三ヶ所村宮野原三ヶ所神社裏遺跡^⑨からも破片が出土している。さらに佐賀県西松浦郡西有田町山本盗人岩洞穴出土の土器も円筒形土器らしい疑いがある。このようにみえると熊本県内のほぼ全域に分布し、東は宮崎県、南は鹿児島県におよんでおり、北や西へさらに分布範囲が拡大するものとみられる。

(3) 円筒形土器の遺構と共伴遺物

円筒形土器の時期の遺構の調査は数例しかおこなわれていないが、特徴ある遺構が発見されている。土壙と集石遺構である。土壙にはほぼ2種類ある。その1つは中原西原遺跡や室山遺跡のように焼土が全くみられない長楕円形の土壙である。大きさから機能としては墓壙や貯蔵穴が考えられるが、今のところ明らかではない。他の1つは諏訪原遺跡や櫛島遺跡^⑩で発見されている内面の著しく焼けた土壙である。長楕円形のものとは不整形なものがあるが、いずれも炉穴と考えられている。集石遺構は櫛島遺跡や久保遺跡で確認されている。この遺構は直径1m程度の範囲内に焼けた河石が集められているもので、下部は皿状の土壙が掘られていることが多い。トラック諸島などの石焼料理の炉^⑪と似ており、そのような機能が考えられる。このような円筒形土器の時期にみられる土壙や集石遺構は、熊本県内では菊池郡大津町無田原遺跡、下益城郡松橋町古保山C遺跡などの押型文土器を出土する遺跡からしばしば発見され、九州各地でも報告されている。さらに押型文土器の時期には全国的にみられるらしく、八幡一郎氏の論文^⑫では中部地方の例がかなり紹介されている。円筒形土器と押型文土器の遺構がともに土壙と集石であることは、円筒形土器の時期を決定する上で重要である。

円筒形土器に伴う土器として塞ノ神式土器が考えられる。櫛島遺跡では破片ではあったが炉穴や集石の中から円筒形土器と塞ノ神式土器の両者が出土した。また緒方勉氏の御教示によると沈目立山遺跡でも両者が同じ地点から出土したという。円筒形土器の採集された遺跡のうち数遺跡から塞ノ神式土器が採集されている。円筒形土器だけしか採集されていない遺跡は、円筒形土器そのものの採集量も少ない遺跡である。また熊本県内では一遺跡における塞ノ神式土器の使用个体数が円筒形土器よりも少ないから発見率も少ないものと思われる。塞ノ神式土器が円筒形土器に伴うと考えるのはさらに下記のような理由があるからである。塞ノ神式土器は円筒形土器の口縁部に上に外開

きの口縁部を接ぎたした器形をしていること、塞ノ神式土器の文様は沈線文・燃糸文・刺突連点文・貝殻圧痕文・貝殻条痕文で円筒形土器の施文具と一致すること、胎土には1～3mmの砂粒を含んでおり、色調も円筒形土器と同じく茶褐色ないし暗褐色を呈するものが多いことなどである。

このほか円筒形土器に伴うものとして、口縁部が直口して、底部が丸底になる器形も推定される。それは櫛島遺跡にみられるもので、口縁部において区別することは困難であるが、この器形もある時期共伴するらしい。大分県直入郡荻町政所遺跡^⑤でこれに類似する器形の土器が出土している。直口で丸底に近い尖底の土器で、口縁部外面にアナダラ属の貝殻腹縁による圧痕文を二段に渡って施したもので、内面は無文で研磨され、押型文土器よりも胎土・焼成ともはるかに勝れている。おそらく円筒形土器と同時期のものであろうと思われる。

また無文土器も円筒形土器に伴うものがあるらしいが器形は不明である。

円筒形土器に伴う石器として、久保遺跡において礫器を紹介した。櫛島遺跡においては礫器、石斧、石匙、石鏃、小形石槍、剥片石器、石皿、磨石、凹石などが出土している。このうち石匙は細長く、両端は尖り、横につまみをつけたもので、特徴ある形態をしている。この種のもは轟式土器に伴って轟貝塚から出土しており^⑥、両土器の関係を考える上で重要とみられる。室山遺跡からは黒曜石の剥片が出土しているが、詳細はわからない。

(4) 円筒形土器の時期

器形・文様・胎土・色調などの類似から、円筒形土器に塞ノ神式土器が伴うであろうことは先に述べた。またこれらの遺構が押型文土器の時期にみられる遺構と同じであることも述べた。遺構が同じであることは押型文土器と円筒形土器の生活環境が似ており、同じような社会生活を送っていた可能性が強く、両者があまり隔たった時期ではないとみられる。熊本県においては口縁部が外反し、胴部がわずかにふくらみ、平底を成す沈目式土器^⑦という押型文土器が知られている。胎土には砂粒を混入し、色調は黄褐色または淡褐色で厚手である。施文部位は外面と口縁部の内側である。好資料の実測図の持ち合わせがないが、105～117（第17図）がほぼこれに相当する。このうち105は口縁部外面の施文法が他と異なり横方向である。あるいは1つ古式の尖底土器であるかもしれない。その他は沈目式土器とみられる。底部はおそらく底面の狭い114の形態が古く、より安定した115～117の形態が新しいものと推定される。押型文土器と円筒形土器の最大の違いは施文具のほかに、器形と色調（焼成）である。先に紹介した円筒形土器出土遺跡のうち多くの遺跡で押型文土器を出土しているが、両者が共伴しないと考えたのは、円筒形土器しか出土しない遺跡と押型文土器しか出土しない遺跡があるというほかに、実は器形と色調の違いがあるからである。器形の違いは今紹介した資料で明らかであるが、色調は押型文土器が黄褐色や淡褐色を呈するのが多いのに対して、円筒形土器は茶褐色ないし暗褐色を呈するのが多い。これは焼成温度の違いとみられ両者が共存したとは思われない。土器観察でみるかぎり、明らかに円筒形土器の焼成が勝れているおそらくは沈目式土器から円筒形土器へと移行するものと推定して間違いはない。この移行期の状態を示す資料が118～127（第18図）である。口縁部が直行し、平底の押型文土器である。施文は外面のみみられ、内面は無文で滑らかに仕上げられている。研磨の顕著なものもある。胴部は殆んど張らず、胴部と底部とは急角度をなして折れている。123は橢円押型文と条痕文が併用され、先に紹介した

50の山形押型文と貝殻条痕文を施した資料とともに移行期の状態を示すものである。胎土には1～3mm程度の砂粒を混入し、色調は褐色・暗褐色を呈する。

円筒形土器の時期は今述べたように押型文土器の直後に編年される。そして黄褐色の押型文から茶褐色の円筒形土器へと変化した色調は、より黒くなり貝殻条痕文・直口・平底の甗式土器へと発展をとげるものと推定される。

(3) 円筒形土器の前後に関する考察

円筒形土器を観察し、他形式土器と比較する時、どうしても従来の編年では解釈しがたいことがわかった。また多くの論文は執筆者の扱う土器中心に論じられているため、その土器誕生の系統をいくつも作り、強引に結びつけていることが多いようである。私は系統がいくつもあったり、あるいはそれが融合したり、分岐したりと述べられていることの多い論文は複雑難解でしかたがない。ほんとうにその前段階でいくつもの系統の土器が共存したのであろうか。あまり隔たらないA、B地点があり、A地点でa式のみ出土し、B地点でb式のみ出土すれば、どちらかが古くどちらかが新しいはずである。その時間差を無視してa系統・b系統としているのではなかろうか。私は円筒形土器を位置づけるため、いくつもある系統を否定し、器形・文様・胎土・色調などの観察から、私なりに大筋の縄文時代早・前期の編年を組みたててみた。その試案がこれである。古い順から述べる。

(1類)

草創期の土器群で、豆粒文土器、隆起線文土器、爪形文土器などがあるが、ここではこれ以上ふれない。

(2類)

外傾の直口で尖底の押型文土器群。施文は外面と口縁部内側におこなわれ、文様は押型文が主である。胎土には砂粒を含んでいる。焼成温度が低く色調は黄褐色・黒褐色で、大形のものすべて黄褐色を呈する。川原田式、早水台式がこれに含まれる。

(3類)

口縁部が外反し、尖底の押型文土器群。施文は外面と口縁部内側におこなわれ、文様は押型文が主である。胎土には砂粒を含んでおり、色調は黄褐色を呈するものが多い。田村式がこれに含まれる。

(4類)

口縁部は外反し、胴がやや張る平底の押型文土器群。施文は外面と口縁部内側におこなわれる。文様は押型文が主である。胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色を呈するものが多い。底面は狭い不安定なものから広く安定したものへと移行する。沈目式、ヤトコロ式、手向山式がこれに含まれる

手向山式土器について片岡肇氏は甗式や曾畑式土器の文様の影響を考えられているが、これらの土器の出現はおそらく手向山式土器の消滅よりあとで、もしそうでないとすれば手向山式土器製作者が模倣するのは文様よりもむしろより高度な土器製作技術ではないだろうか。私は手向山式土器は口縁部外反と胴部の張りが極度に発達しすぎたため生まれた器形と考え、胴部の屈折部の凸帯な

どは補強の必要上つけられたものと解釈したい。文様も特異な器形なるが故に押型文施文の難しさから手向山式土器製作者自身が生み出したのではなからうか。

(5類)

口縁部直行で平底の押型文土器群。施文は外面に限られ、内面は無文となる。文様は押型文が主である。胎土には砂粒を混入している。色調は黄褐色よりも茶褐色ないし暗褐色が多くなる。石清水式がこれに含まれる。熊本県玉名郡長洲町ヒイデン海底遺跡^⑤の土器群もこれに含まれる。押型文土器最後の器形である。

(6類)

口縁部直行で平底の円筒形土器群。施文は外面の胴部上半におこなわれ、内面は無文で研磨されている。文様は貝殻条痕文が主で、貝殻圧痕文、櫛目条痕文、燃糸文、絡縄帯圧痕文、沈線文などがある。胎土には砂粒を混入している。色調は茶褐色ないし暗褐色を呈するものが多い。本稿で紹介した資料がこれにあたり。塞ノ神式がこれと共伴する。その他吉田式、前平式、石坂式、跡江式、柏田式などもこの時期に含まれる。また一部に丸底や尖底もあるらしく。政所式もこの時期のものである。

塞ノ神式土器については河口貞徳氏^⑥は曾畑式土器から分岐したとしておられるが、曾畑式土器とは器形・文様・胎土・色調（焼成）ともかなり異なる。より勝れているとみられる曾畑式土器はまだ出現していないと思われる。

(7類)

口縁部が直行あるいはわずかに外反し、平底または丸底・尖底の貝殻条痕土器群。6類と異なり貝殻条痕を器面内外に施す。ミミズばれ状隆起線のあるものもみられる。胎土には砂粒を混入している。色調は黒褐色ないし灰黒色を呈する。器壁は薄くなり、焼成もよい。轟式土器がこれにあたる。

松本雅明氏は四式に分類^⑦しておられる。そして底部形態は尖底から丸底を経て平底へ至るものとしておられる。しかし、土器製作技術や焼成の比較において円筒形土器から轟式土器へと移行したと解釈している私は、平底の轟式土器が古い時期にもあるのではないかと思う。そして最後に残るのが丸底ではないだろうか。口縁部のうち松本雅明氏がD類とされている「内外の条痕がほとんどなくなり、表面の施文はハイガイの外に、竹管・ヘラなどを用いて、内外に短直線文・列点文・爪形文などを施す」ものは曾畑式土器出現の前段階として注目される。

(8類)

口縁部が直口あるいはやや外反し、底部が丸底の沈線文土器。施文は器面全体におこなわれるものが多い。文様は細い篋状あるいは棒状施文具による沈線文や列点文で、これらを組み合わせて幾何学文様を構成している。胎土には小砂粒を混入したものと滑石粉末を混入したものとがある。色調は灰黒色を呈する。曾畑式土器がこれにあたる。胎土や焼成において轟式土器よりさらに勝れている。

杉村彰一氏はこの土器を三式に分類^⑧し、朝鮮の櫛目文土器に始源を求められている。しかし、私は今までみて来たように轟式土器まで発展した縄文土器文化が、突如として伝統を破棄し、外来の

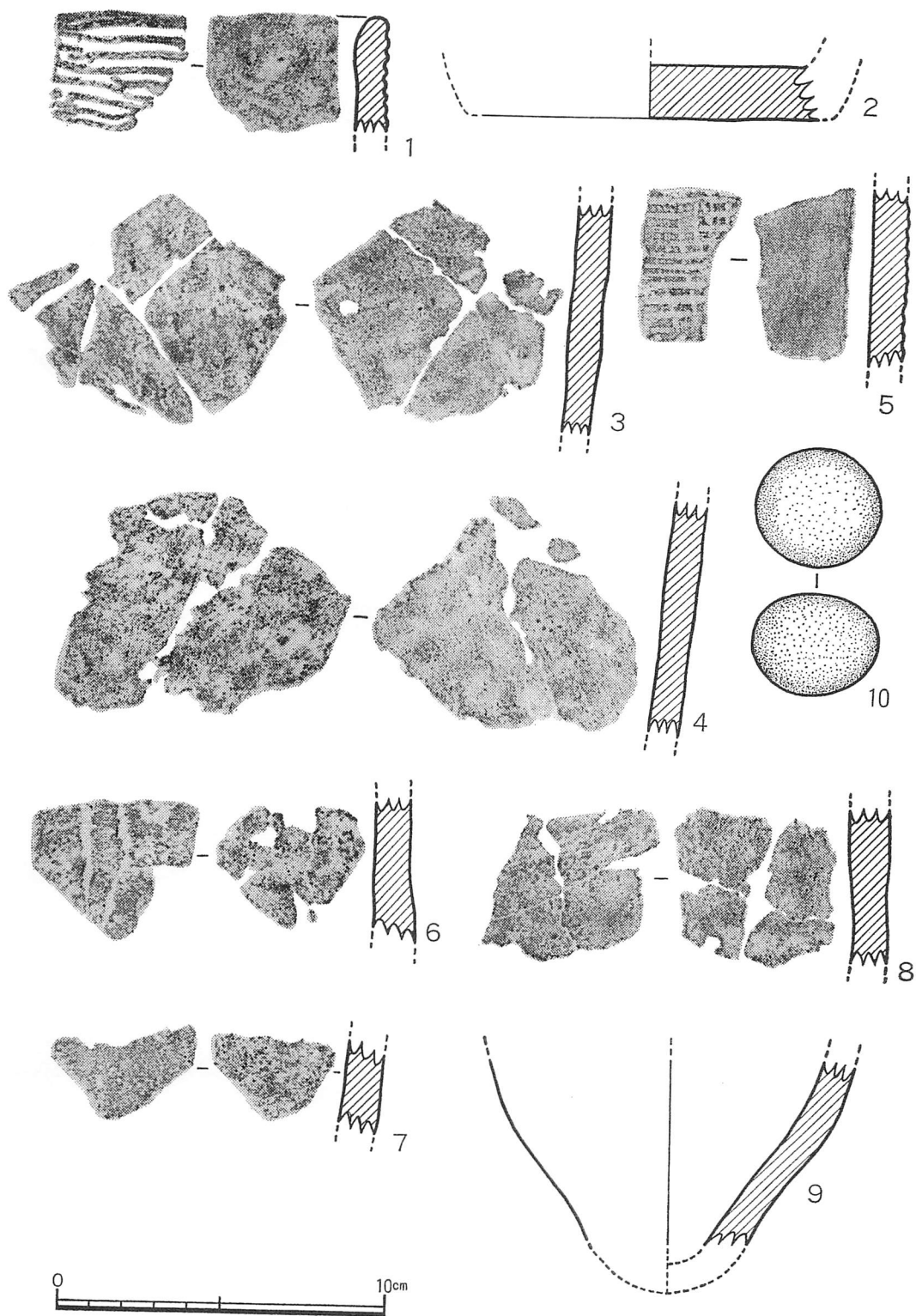
櫛目文土器を受け入れたとはとても思えない。両者の関係を否定はしないが、むしろ松本雅明氏が轟D式土器との関係を考えておられるように、私も轟D式土器に始源を求め、その発展形態として曾畑式土器を理解したい。おそらく単純な文様を施す滑石粉末を含まない曾畑式土器から始まり、複雑な文様で混石粉末を混入する曾畑式土器へと変化し、再び簡略化された文様を経て、中期の阿高式土器へと移行するのではなかろうか。阿高式土器には滑石粉末を混入したものがあり、施文具は曾畑式土器のものを大きくしたにはかならないからである。

以上1類から8類まで分類し、順を追って変遷するものと考えた。それでは早期と前期をどこで区切ればよいのであろうか。これは即断できるものではないが、ここでは一応、施文法のところから技法（押型文）から引く技法（貝殻条痕文・沈線文など）への変化の最も顕著な5類と6類の間で区切ることを提言しておきたい。そして1類を草創期、2類を早期前葉、3・4類を早期中葉、5類を早期後葉、6類を前期前葉、7類を前期中葉、8類を前期後葉としてはどうであろうか。もちろんこの編年試案に対して大方の研究者は非難されるであろうことは知っているし、また私にも訂正する余裕は充分にある。しかし押型文土器を前期にしたり、轟式土器や曾畑式土器を早期にしたような訂正まではいたらぬのではないかと思うのである。

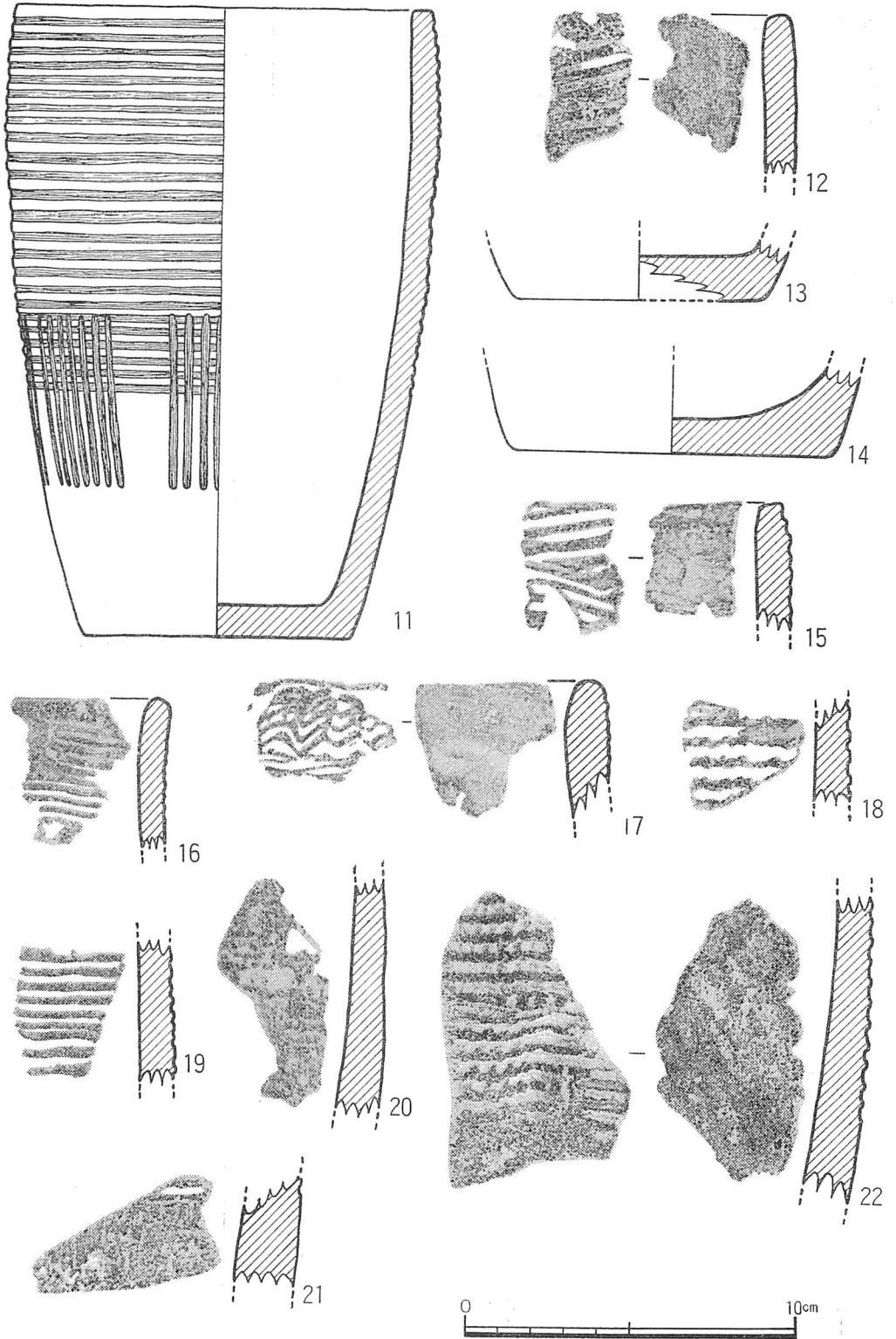
おわりに

本橋ははじめは円筒形土器の資料紹介のつもりであったが、時期を決定する段階になって、今までの矛盾の多い常識的な編年表では位置づけられなくなり、編年試案まで作成することになってしまった。諸先学に対しては大変ご無礼をし、また常識外れなことも書いてしまったと思うが、お許し願いたい。大方の叱正を賜われれば幸いである。

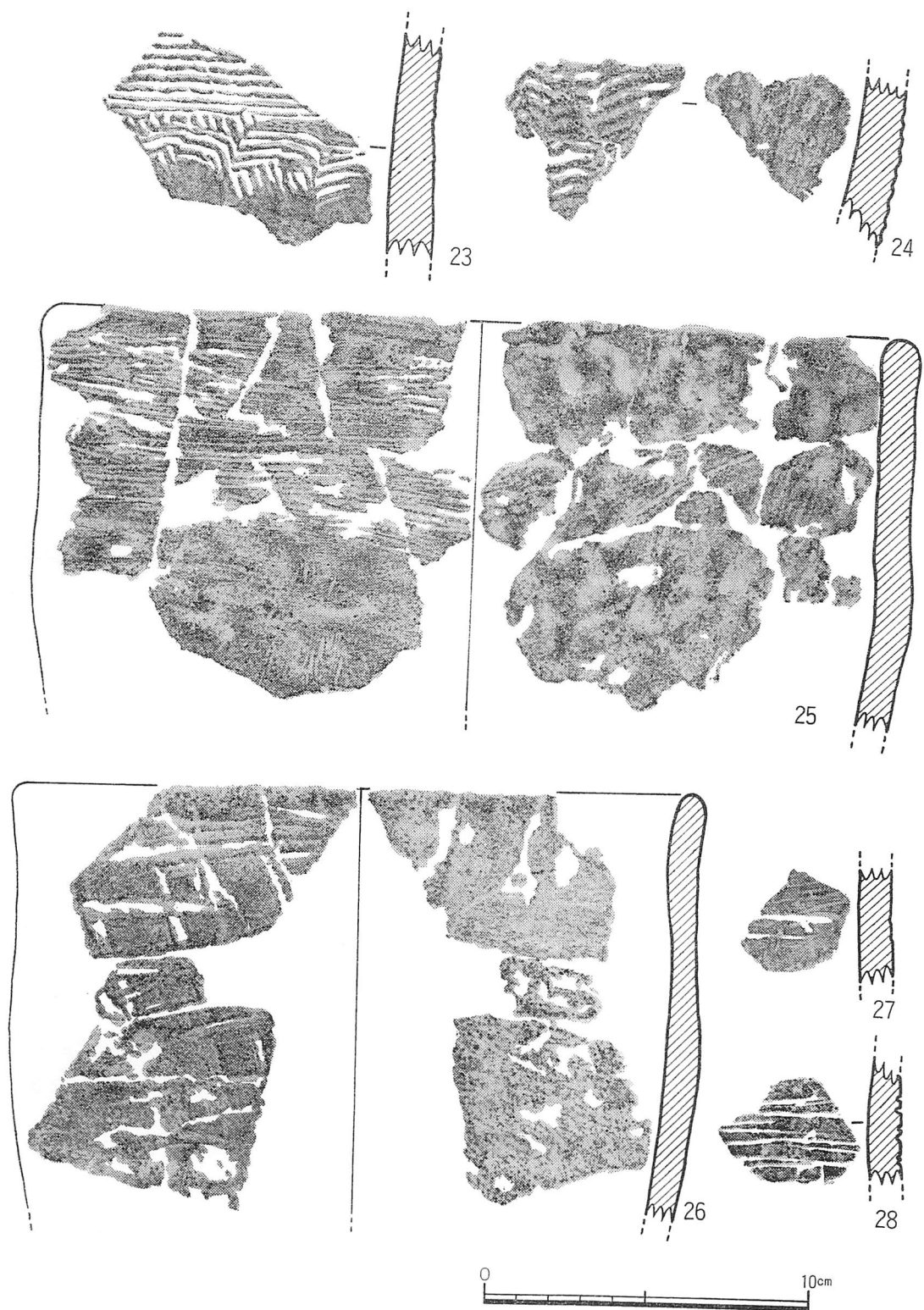
本稿を草するにあたり、恩師賀川光夫先生をはじめ、橘昌信・緒方勉・東光彦・光沢徳行・島津義昭・山崎純男・隈昭志・杉村彰一・坂田義広・坂本一・佐藤伸二・西健一郎・中村修身・片岡肇・故田中義信夫人・田中義和・井上兼利・森醇一郎・永井剛・富田紘一・坂本経昌・白石巖・上野辰男・村井真輝・野田拓治・江本直・津川朱美の諸氏や、熊本県文化課・熊本博物館・天草クリシタン館・西原村教育委員会・河原小学校など多くの方々の御指導と御協力を得た。末筆ながら銘記して心から謝意を表す次第である。



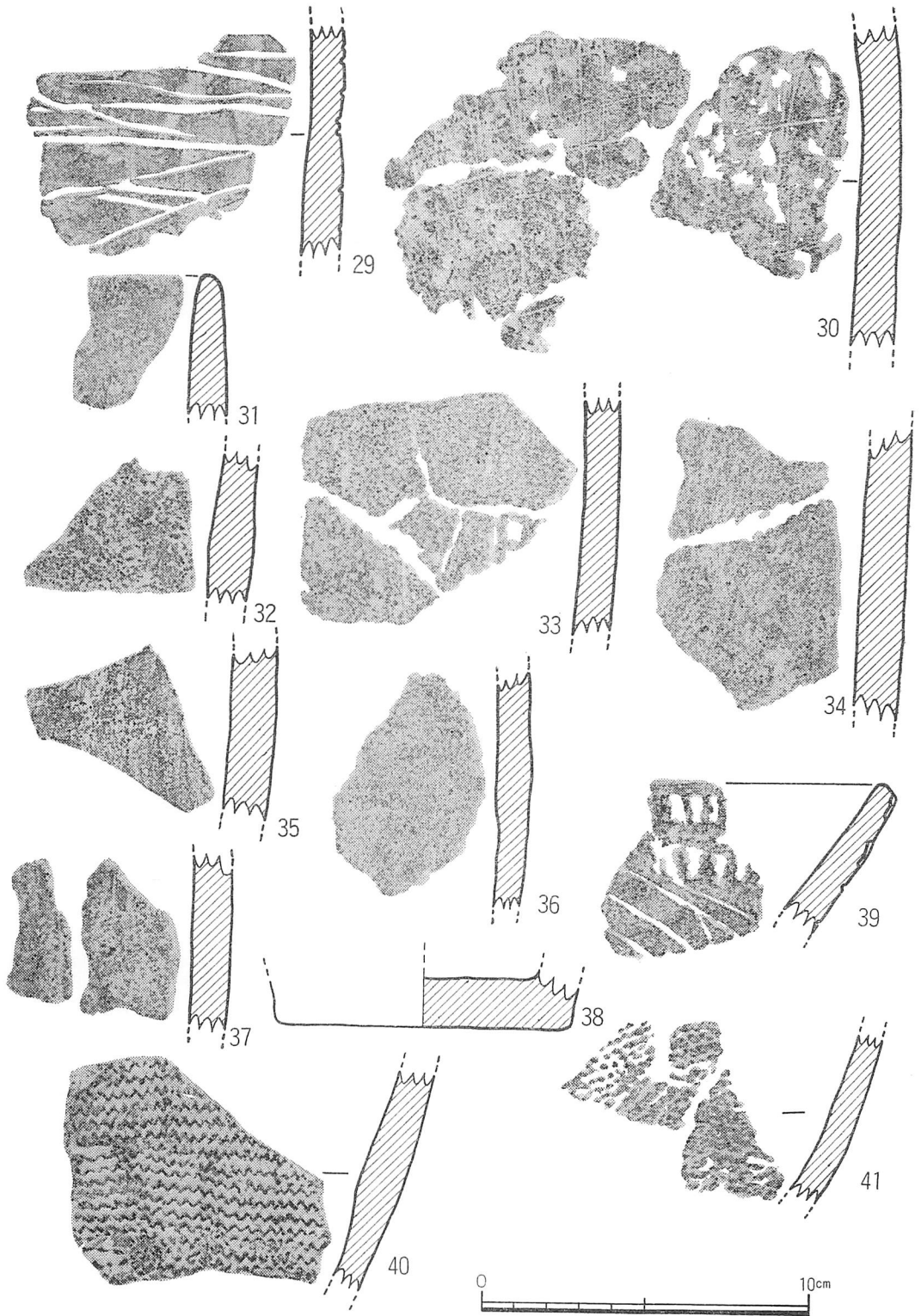
第4図 中原西原遺跡の土壌内出土土器・石器



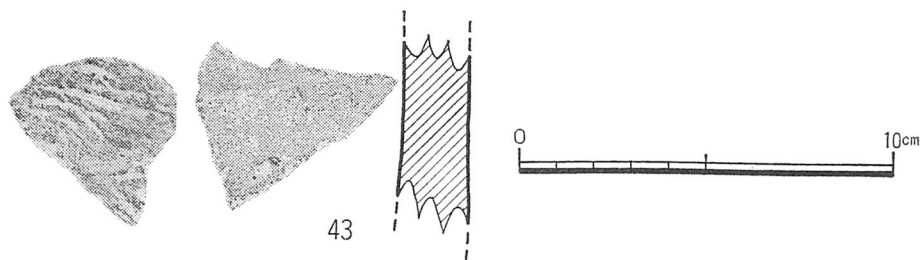
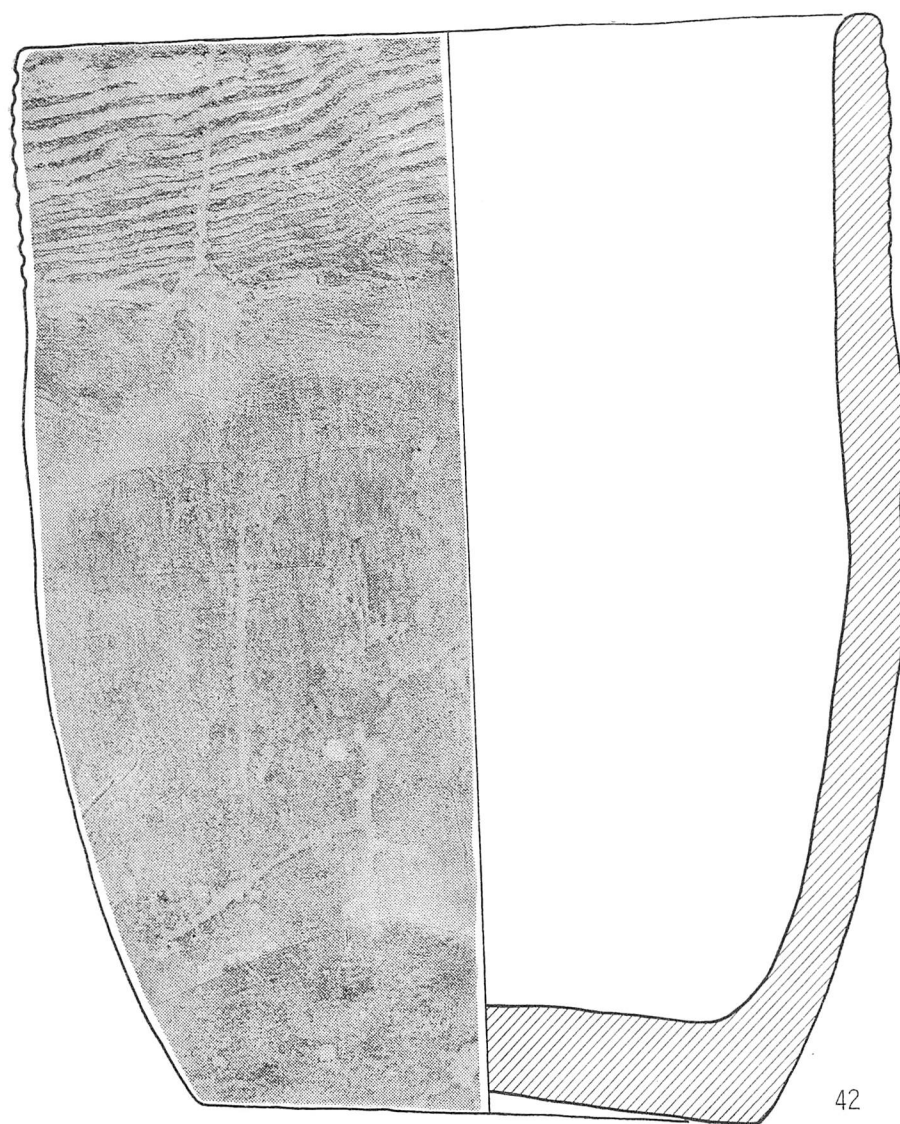
第 5 図 中原西原遺跡の土器



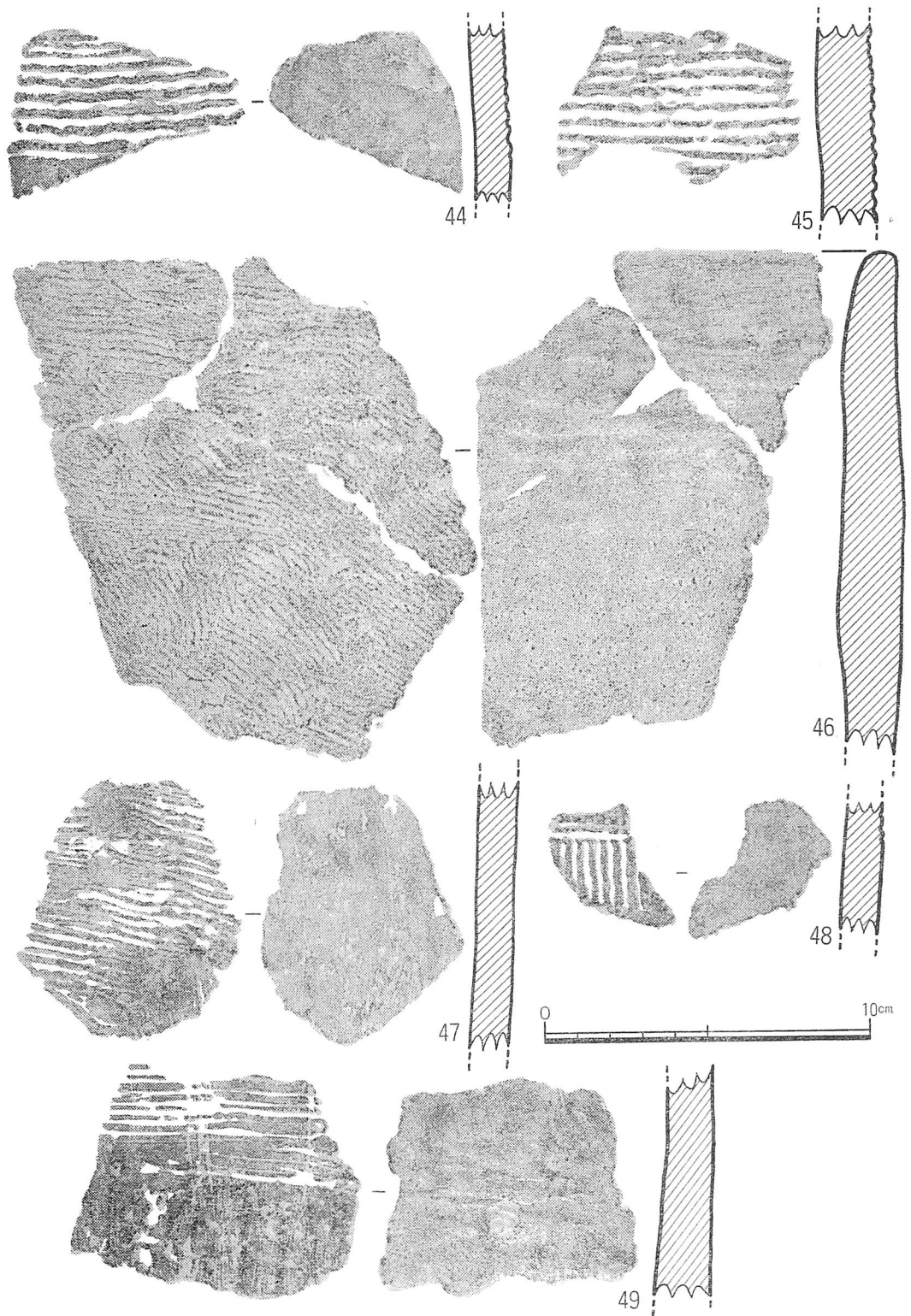
第6図 中原西原遺跡の土器



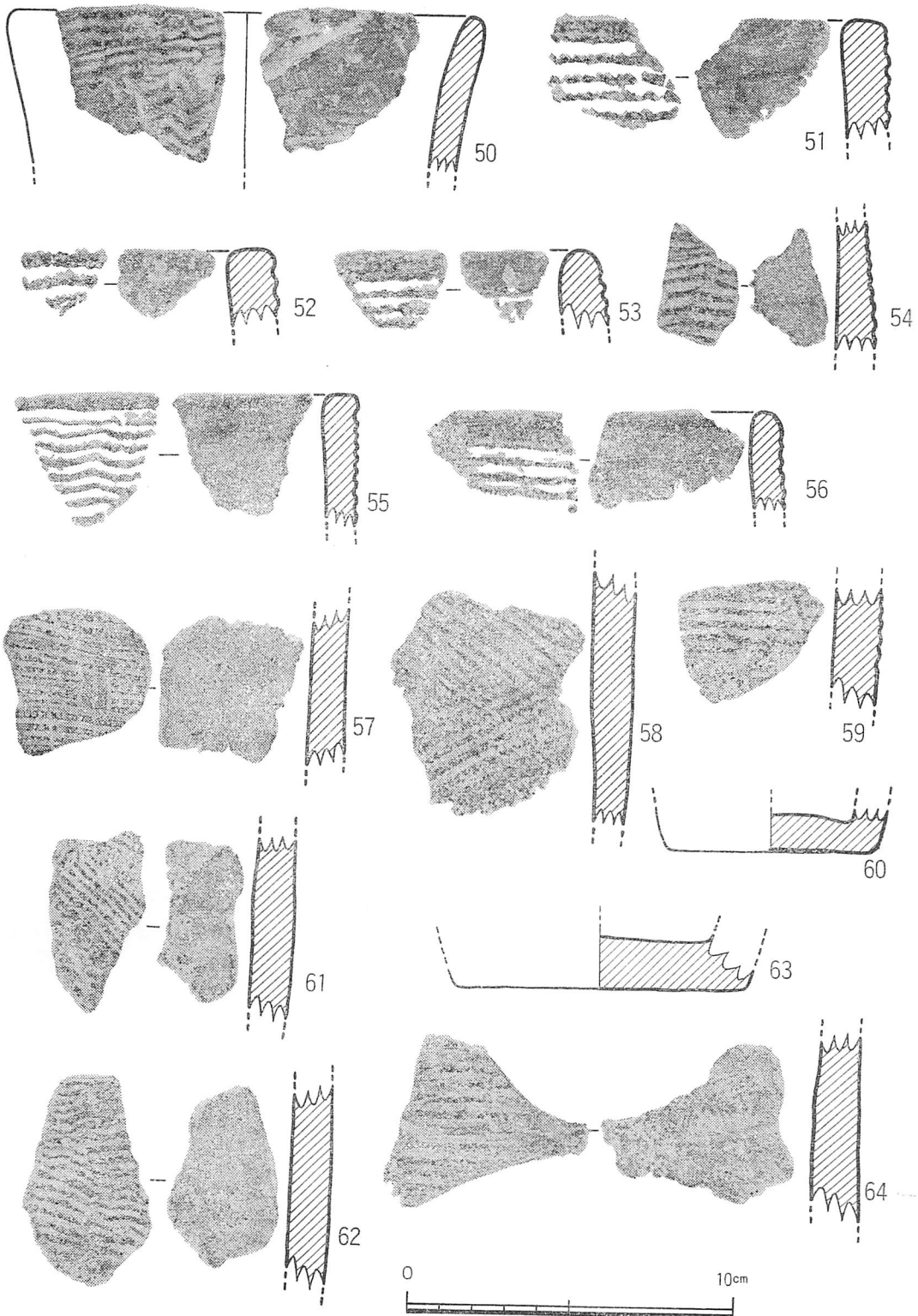
第7図 中原西原遺跡の土器



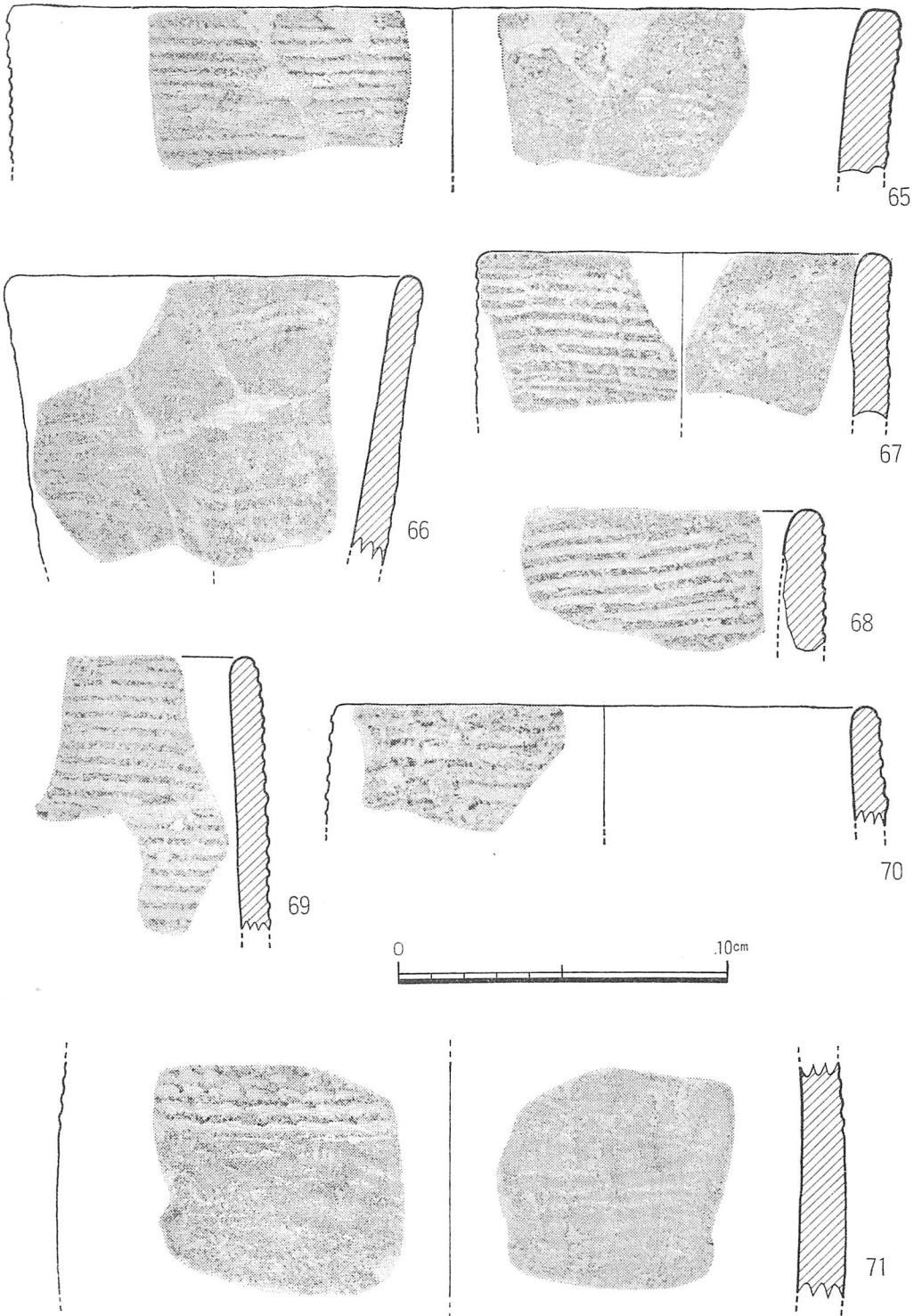
第 8 図 熊本県の円筒形土器 (42諏訪原遺跡 43赤穂原遺跡)



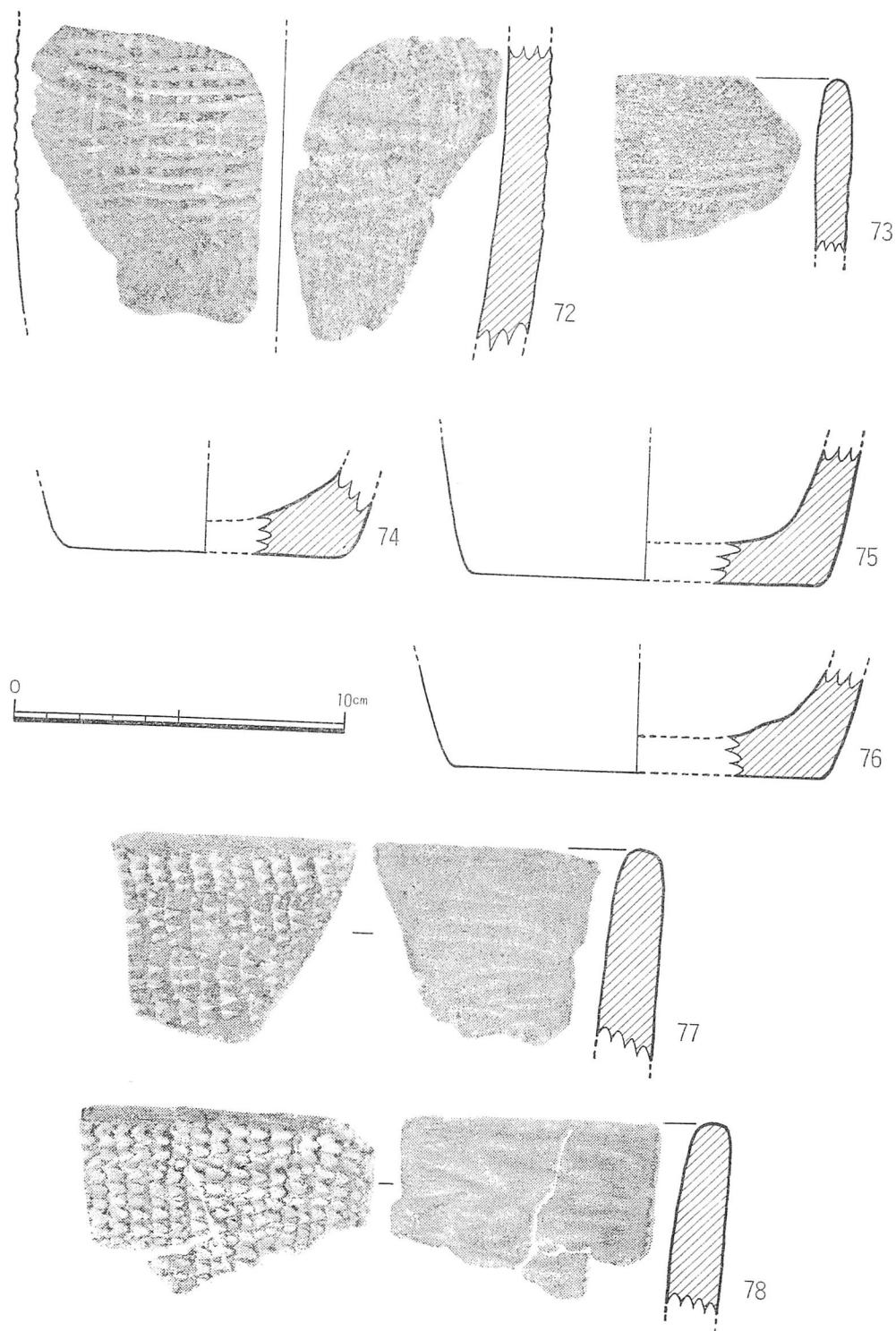
第9図 熊本県の円筒形土器（44.45向原遺跡 46上鍋遺跡 47瀬田遺跡 48.49雨留尾遺跡）



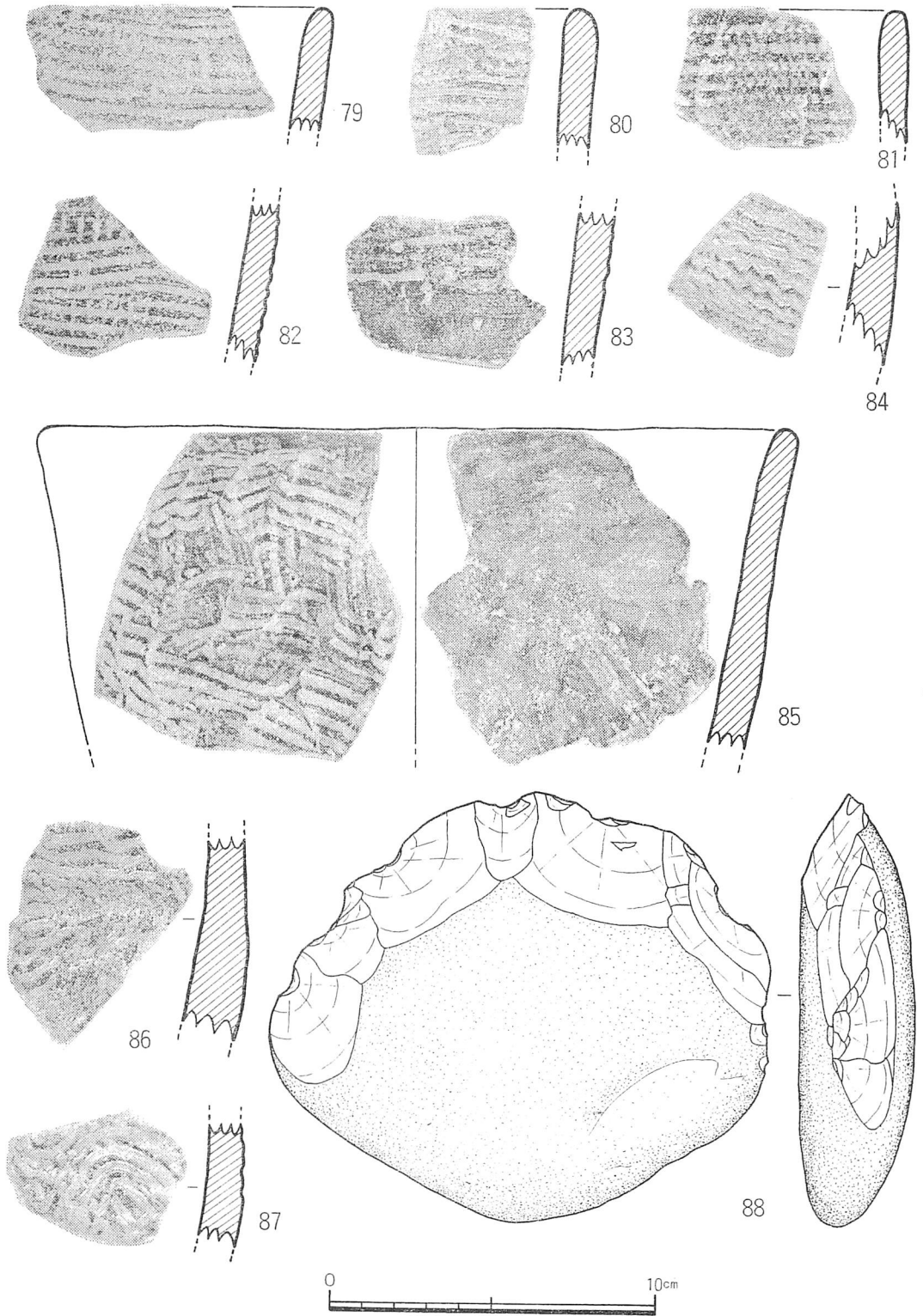
第10図 熊本県の円筒形土器 (50~53年神遺跡 54~60一丁畑遺跡 61~63辛川遺跡、64曲手遺跡)



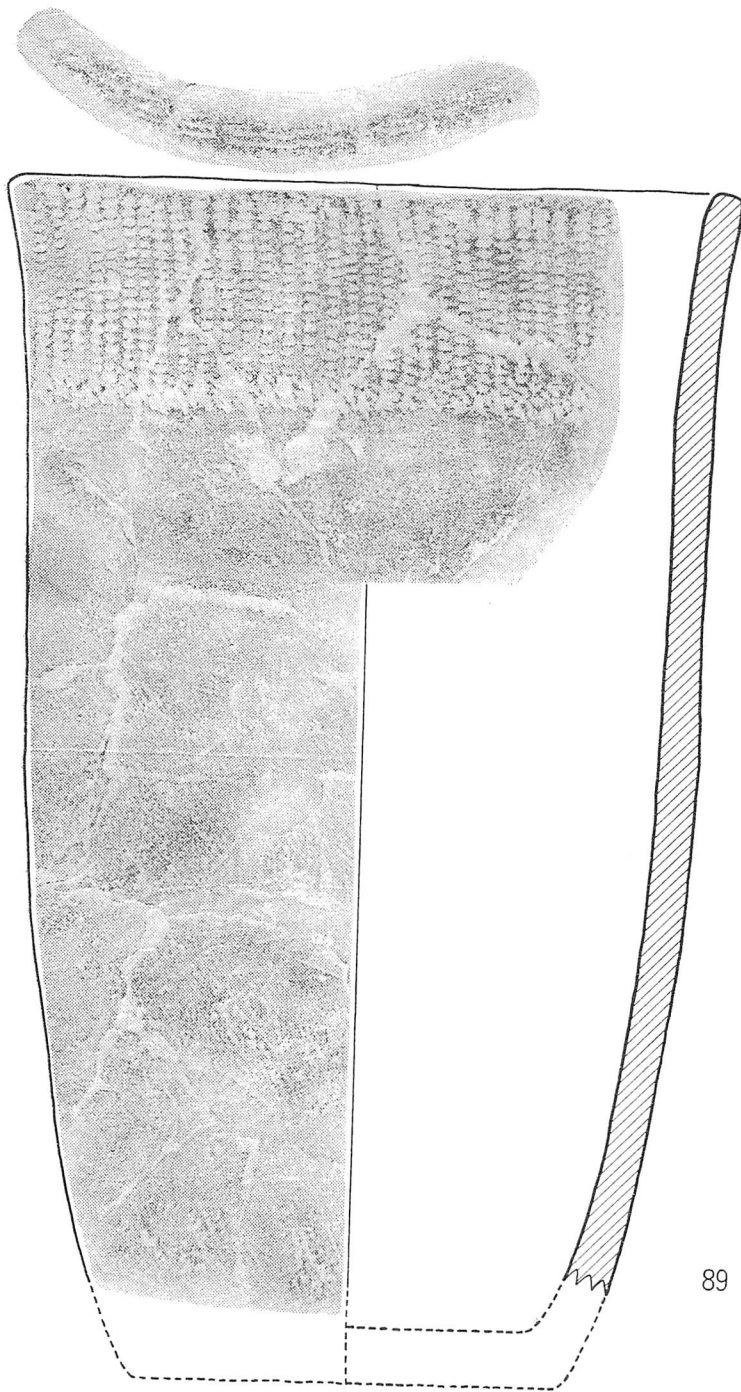
第11図 熊本県の円筒形土器 (65~71兎山遺跡)



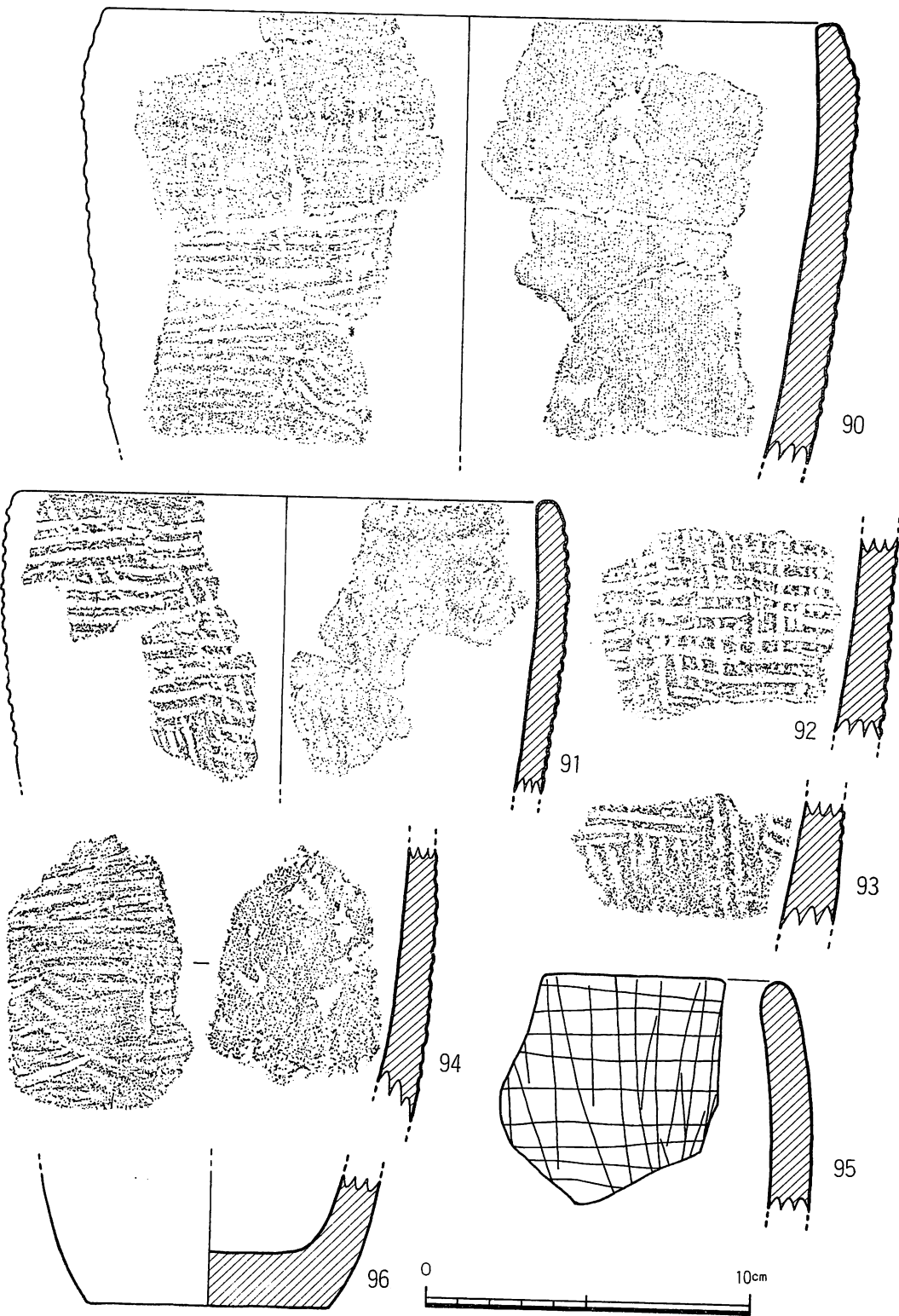
第12図 熊本県の円筒形土器（72~76兜山遺跡 77.78襟ノ平遺跡）



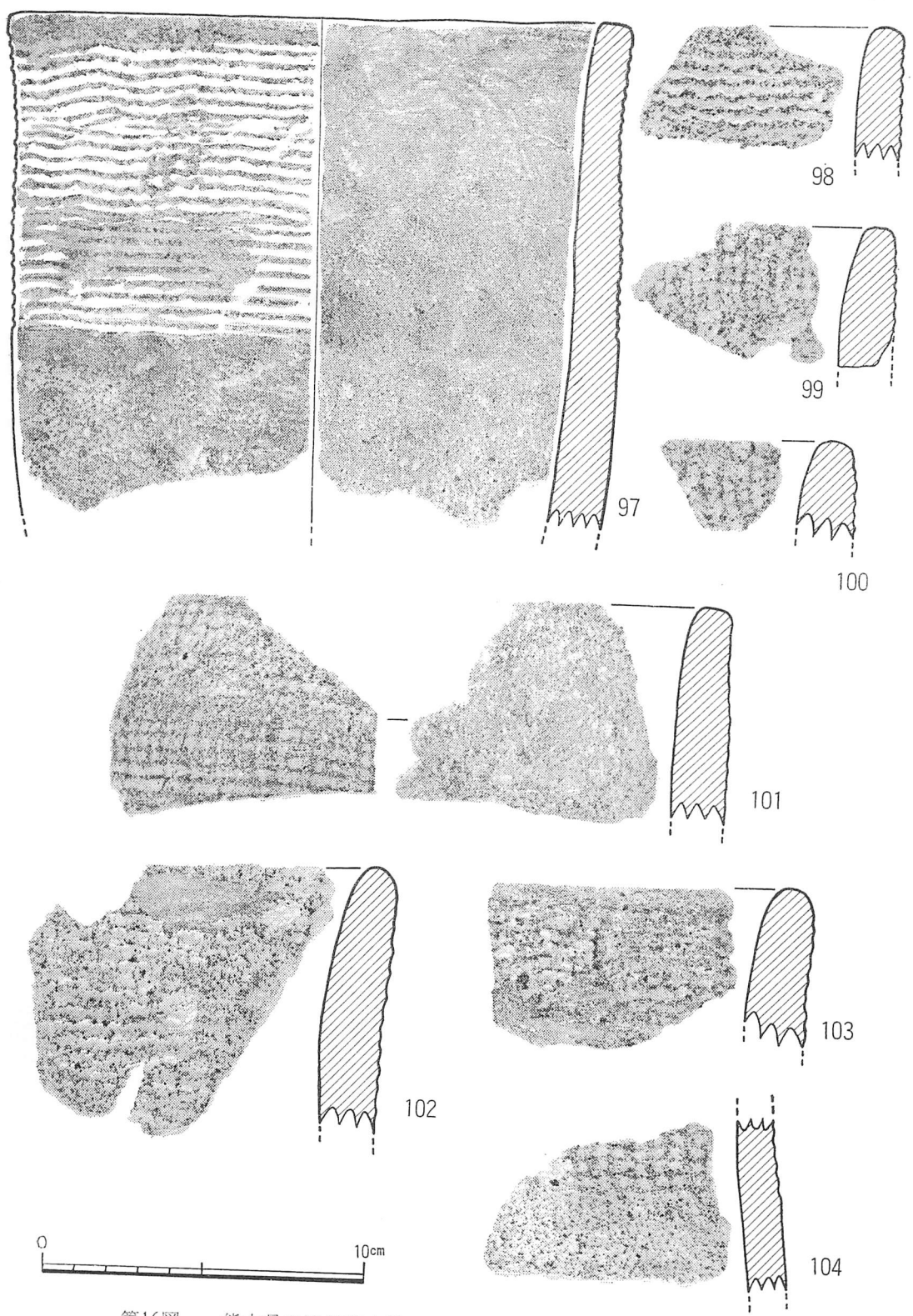
第13図 熊本県の円筒形土器（79～87久保遺跡 88久保遺跡の石器）



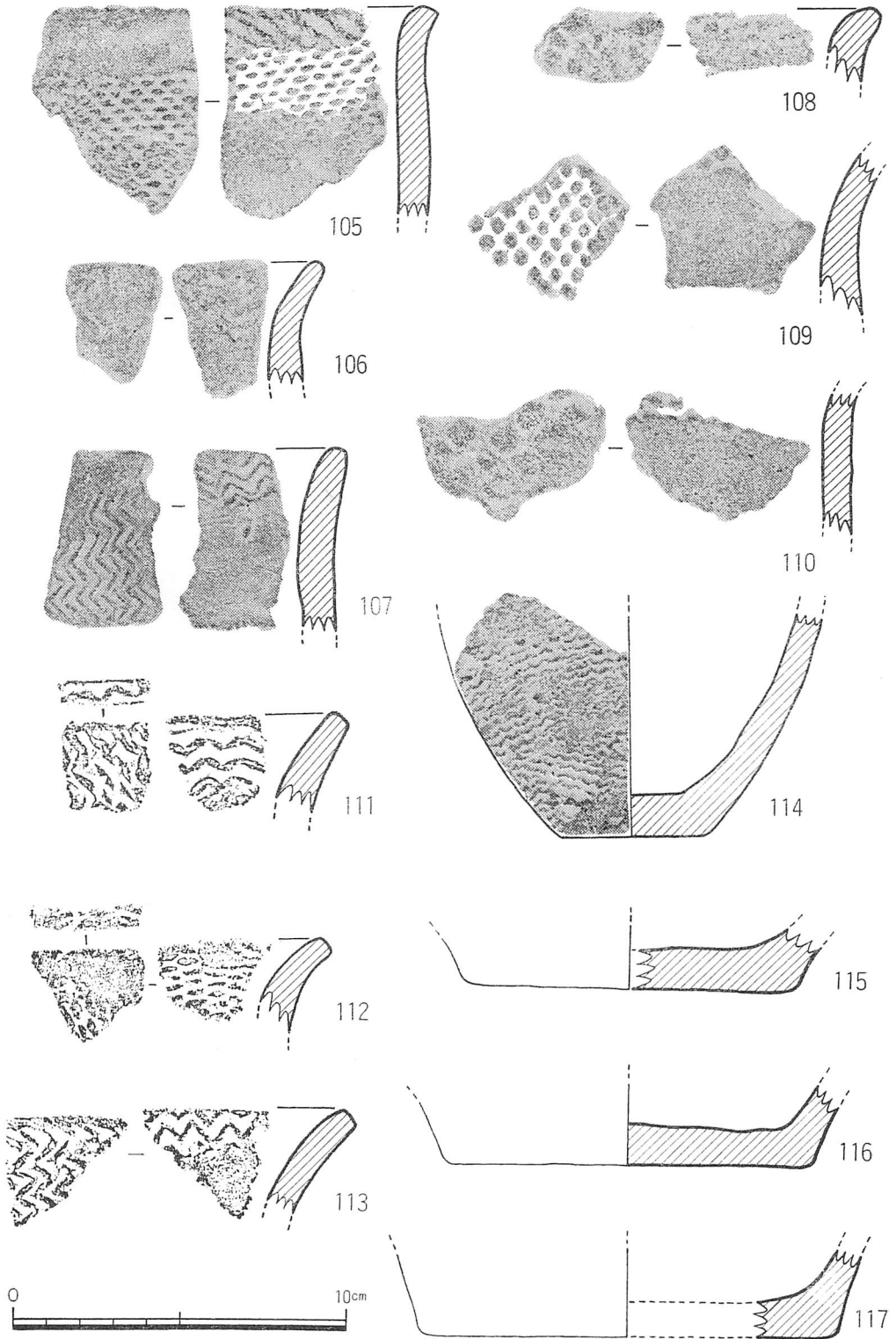
第14図 熊本県の円筒形土器（89塚原遺跡）



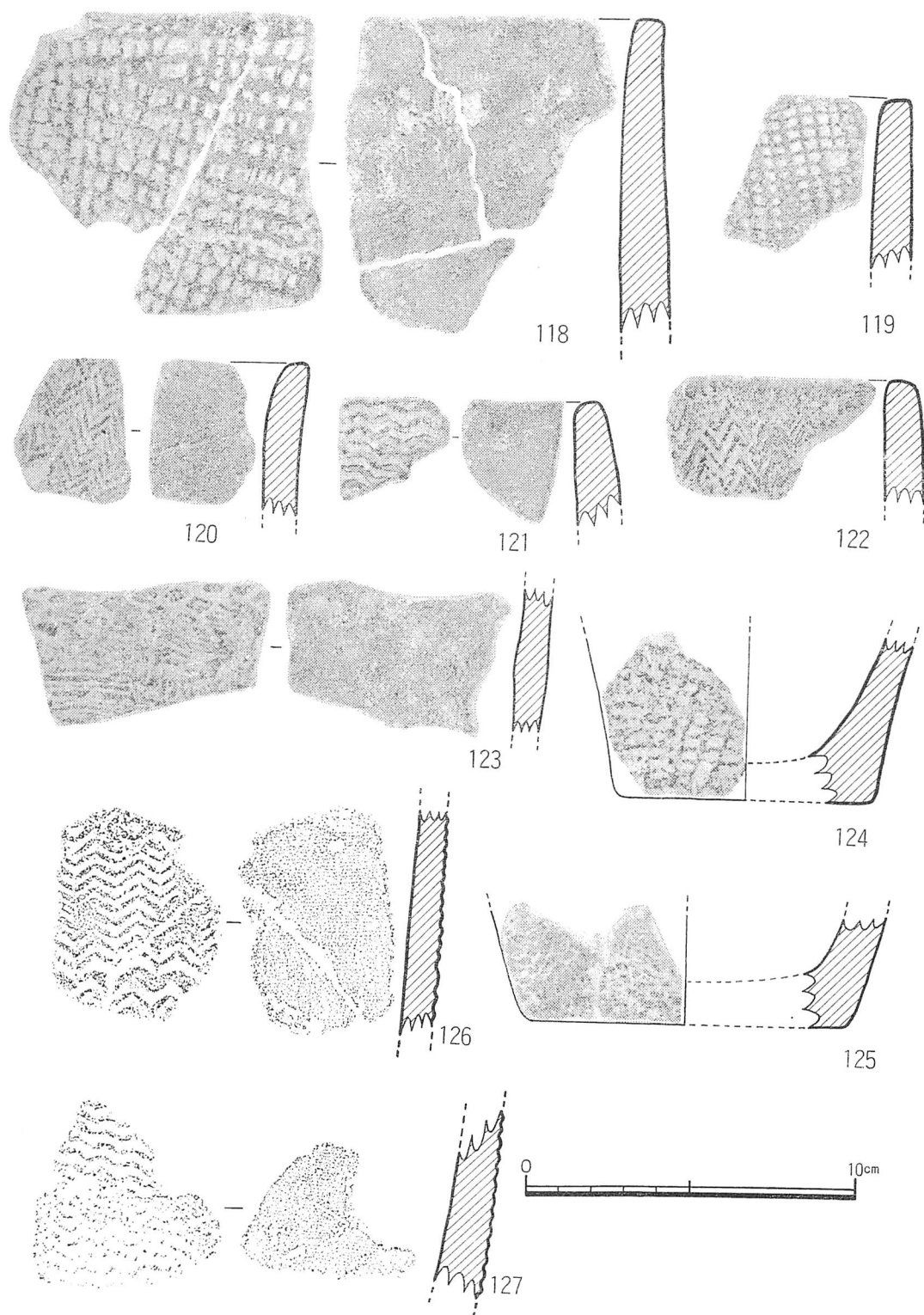
第15図 熊本県の円筒形土器 (90~96尾窪遺跡)



第16図 熊本県の円筒形土器 (97秋田原遺跡 98~104丸尾ヶ丘遺跡)



第17図 熊本県の押型文土器 (105瀬田遺跡 106~110年ノ神遺跡 111~113塚原遺跡 114雨留尾遺跡 115~117兜山遺跡)



第18図 熊本県の押型文土器（118・120・121・123・125年ノ神遺跡 124一丁畑遺跡 126・127尾窪遺跡）

参 考 文 献

- (1)東 光彦・富田紘一, 1969: 鹿本郡植木町富久保遺跡。熊本博物館館報, 1.11~13頁。熊本。
このなかで東光彦氏は「カブト山、小関原でみられる条痕文土器は、厚手、深鉢形、平底(?)で、土器上半に横走平行貝殻条痕文を付し、下半を無文に置き、篋磨きし、土器内面もよく研磨された、特徴あるものである。」と述べられ、同氏は逸早く注目されていた。
- (2)高木正文・清水宗昭, 1971: 熊本県玉名郡菊水町発見の先土器時代遺物について。九州考古学, 41~44. 2~6頁。福岡。
- (3)緒方 勉, 1971: 諏訪原遺跡発掘調査概報。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報, 1~16頁。熊本
- (4)緒方 勉, 1975: 櫛島遺跡。熊本県文化財調査報告, 18.195~290頁。熊本。
- (5)富田紘一, 1976: 原始・古代。鹿本町史, 36~147頁。熊本。
- (6)註5に同じ。
- (7)註1に同じ。
- (8)故坂本経堯氏の「菊池文化財調査票」(38頁)にある。
- (9)註1に同じ。
- (10)註1に同じ。
- (11)註4に同じ。
- (13)緒方 勉・高木正文編, 1975: 久保遺跡。熊本県文化財調査報告, 18。熊本。
- (14)緒方 勉, 1970: 熊本県上益城郡御船町干無田遺跡出土の縄文土器。九州考古学, 38.2~6頁。
- (15)註14に同じ。
- (16)註14に同じ。
- (17)隈 昭志・野田拓治他編, 1975: 塚原。熊本県文化財調査報告, 16。熊本。
- (18)高木正文・江本 直, 1973: (尾窪)その他の遺物。熊本県文化財調査報告, 12.49~51頁。熊本。
- (19)宮原町教育委員会, 1976: 室山古墳調査報告書。熊本。
- (20)河口貞徳, 1972: 塞ノ神式土器。鹿児島考古, 6.1~44頁。鹿児島。
- (21)乙益重隆, 1960: 高千穂の先史文化。高千穂・阿蘇, 59~78頁。東京。
- (22)森 醇一郎, 1965: 佐賀県西松浦郡国見町山中発見の洞穴。日本洞穴調査会会報, 17。
- (23)印東道子, 1976: トラック諸島の石焼料理。えとのす, 7.109~113頁。下関。
- (24)八幡一郎, 1972: 日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究(上)。東京。
- (25)賀川光夫, 1971: 大分県の考古学。東京。
- (26)松本雅明編著, 1965: 城南町史。熊本。
- (27)註26に同じ。
- (28)片岡 肇, 1970: 手向山式土器の研究。日本始原文化の研究, 1.65~98頁。京都。
- (29)坂田邦洋, 1964: 曾畑式土器に対する一考察—長洲町ヒイデン海底遺跡—。九州考古学, 22.2~5頁。福岡。
- (30)註20に同じ。
- (31)松本雅明・富樫卯三郎, 1961: 縄式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—。考古学雑誌, 47—3. 1~6頁。東京。
- (32)杉村彰一, 1965: 曾畑式土器論考。九州考古学, 24.1~7頁。福岡。